徳島大学総合科学部　人間社会文化研究
第12巻(2005) 25－65

清朝中期以降中国人満洲移民出身地の分布

荒武達朗

文化人類学者鳥居龍蔵の著作には、その考古学、人類学に関係する記述のみならず、彼が見聞した事件についての記録も相当に含まれている。それ故に同時代的観察者の残した資料としても価値があると言えよう。彼は1927年8月から10月にかけて通算第八回目の満洲・蒙古の調査を行った。この1927年という年には、関内（山海関の内側、つまり華北）において連続して発生した自然災害と中国統一戦争（北伐）の波及によって、多数の難民が満洲へと流出しはじめた。これから満洲事変の発生する1931年までの数年間は年間100万人を超える人口流動のピークであった。これを目睹した鳥居龍蔵の著作『満蒙の探査』の各処には満洲へ流入する漢人の姿が描かれている。なお本稿では資料を引用する際に、明らかな誤字の訂正と句読点の補足を行い、旧仮名遣いと旧字体を現在のそれに書き改めている。

「近時、シナ政府は個人のみならず、大々的移住を奨励して居る。ここに於いて山東省より続々として来る。然し最初の移住者は良好の所を開いて居るが、今日では非常に奥地に行かねばならぬ。私が今回の調査中、鳳凰城の田舎で出会わした移住民に就いての話を、ここにして見たいと思う。場所は海城から岫厳街道である。極めて田舎の道に過ぎないが、鉄道の出来ざる前には大きな道であった。此処で私は山東移住民の人々に出会わした。彼らは僅かの手廻りの物を売代なして、この街道を車にも乗らず徒歩で通って居る。その中で私の話したいのは、両親がその娘（十五六歳ぐらい）男の子（十二三歳くらい）両人を連れ、破衣を着、背に荷物を背負い、トボトボ徒歩きをしている。母親は疲れ切ってヨボヨボとして居る。この四人連れの家族は全く貧民で、故郷で僅かの身の代を売り払って旅費として、此処まで来たものである。彼らは総てのものが物珍しそうで、我らをしきりに見つめていた。その話によると、彼らは木賃宿に泊まり、数日徒歩し鴨緑江の上流帽児山附近に行き、其処に居る友人を頼りて、其処で農業をするといった。」[1]

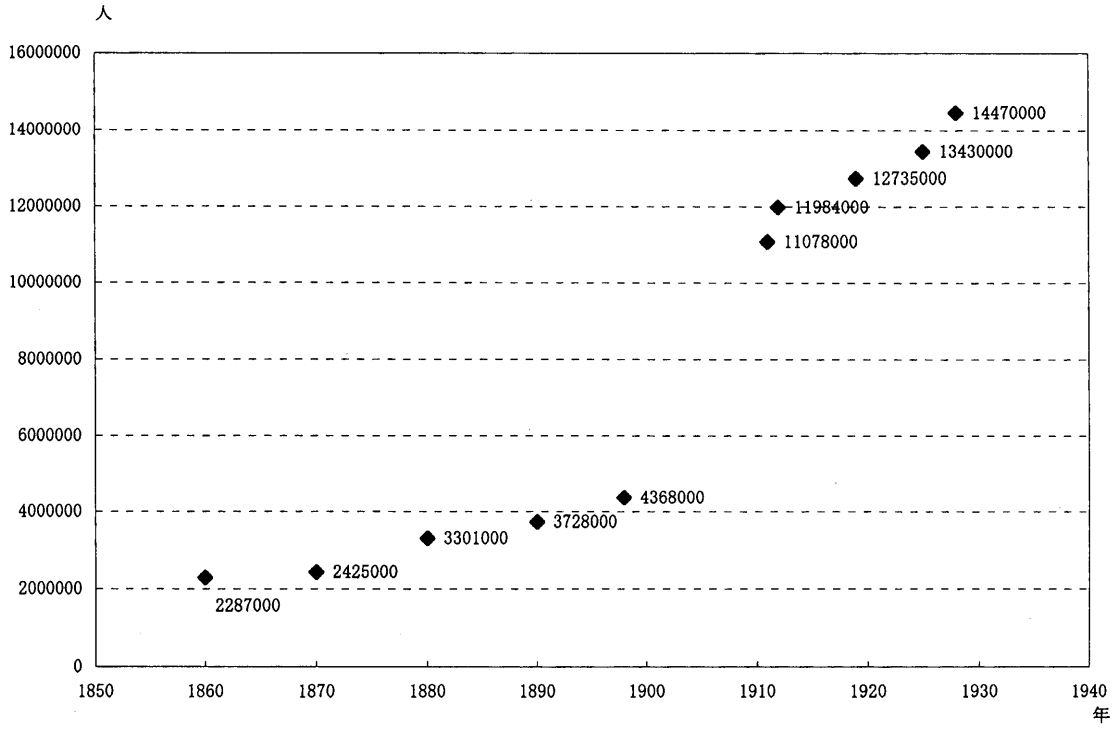
この資料には1920年代の満洲への難民が描写されている。遼東半島の鳳凰城は朝鮮半島にほど近い山地である。ここで出会った山東出身の一家は故郷の僅かばかりの家産を処分し満洲へと流入し、先行した友人を頼って鴨緑江の上流の山岳地帯まで行こうとしている。家族の携帯、家産の処分は、その故郷への帰還を前提としていないように考えられる。だが鳥居龍蔵は彼自身の見聞と調査によって、この山東からの移住民が決して自然災害という偶発的なものによって生み出されたものではなく、山東と満洲との強い連関の中から必然的に紡ぎ出されたものであると述べる。

「そもそも現今の満洲は人類学上からいえば、全くシナ山東省の聯絡であるといってよい。それは今日の満洲に居住する者は、昔から此処に居った民族でなく、近代に於いて山東省から移住して来た漢族の移住民である。」[2]

鳥居の言う「近代」がいかなる時代を指すのかは判断できないが、中国人にとっての満洲が山東社会の延長上にあったとの理解は傾聴に値する。

山東人の満洲への移住はこの時点、あるいは一般的な意味での中国の近代という時代に始まったものではない。断片的な資料であるが、梶原子治の満洲農家の土地売買に関する研究には、農家の入満以来の土地増減についての事例がいくつか紹介されている。ここに引用される事例の多くは山東出身の農家のものである。例えば南満の遼陽県桜桃村後三塊石屯のＳ氏は清初の順治8年（1651年）に山東省登州府より入満したという。また安東県湯山城村のＳ家は60年前に鳳凰城に来住し光緒元年（1875年）に安東県龍泉溝に転住、300畝の土地を払い下げられた。光緒20年に第一回目の分家を実施し、以降数回の分家で土地は零細化した。そして満洲国の大同元年（1932年）に湯山城に居住したという。さらに、四平省Ｓ県城のＳ氏はいつかは不明だが山東出身であり、光緒27年にＳ県へ移住し、民国4年（1915年）に雑貨兼雑穀商、同9年油房業、11年これを廃業して糧桟を兼営した。満洲国の康徳8年（1941年）には典当業（質屋）をも兼ね、所有土地面積は13663.6畝へと拡大した[3]。山東出身の農家は清初より清末民国期にいたるまでその存在を見出す事が出来るので、一貫して山東省から満洲へと人口の流入があったと考えられよう。

本稿の目的を述べる前に清代以降漢民族の満洲移民の概略を押さえておきたい[4]。漢民族の植民は



資料：趙文林・謝淑君『中国人口史』人民出版社、1988年、表「中国各省区歴代人口数」

図１　１８５０－１９４０年満洲の人口増加

18世紀に本格化した。ただし満洲の人口増加に目を移せば、この時期の増加は緩慢であり、後に見られるような人口の激増、移民の奔流化には至らない。封禁政策は19世紀前半の嘉慶年間と道光年間には充分に弛緩しており、世紀の半ばには漢人の入域を容認し官有荒地の開放が進行した。だが満洲の人口変動の傾向を見れば（図1）、これが即ちに人口増加に繋がったわけではなく、やや遅れて1900年初と1920年代に人口増加が拡大している[5]。1900年代初以降は、俗に「十年一倍」（十年で二倍になった）というようにかつてない速度で人口が激増する。これは東清鉄道の敷設による影響を直截的に受けた交通状況の改善、満洲と世界経済との連結を背景とするものであった。1920年代には華北での戦乱・自然災害の発生というネガティブな要因、及び世界経済の中で中国農業の地位が向上したというポジティブな要因の両者が相乗的効果を生み、年間百万人を超える人々が満洲へ流入した。だが1930年代、満洲事変の後華北と満洲との間が一時的に断絶し、満洲国が労働力移動の統制を開始した為、増加傾向は鈍化した。

このように満洲への人口移動という側面に着目すれば、近現代における満洲への漢民族移民は一、清代中期から1900年初まで、二、1900年初から1920年代前半まで、三、1920年代後半以降1940年代までという三つの時期に分ける事が出来る。先学の研究により山東省出身者が多数を占めている事は判明している。またおそらくは満洲に近接する地域を出身地とする移民が最も多いだろう事も感覚的に理解できよう。しかし移民が山東省のどのような地域において析出されるのか、時期的な変遷はあるのか、といった点はイメージを越えるものではなかった。例えば、満洲に近接する山東半島と河北省の北東部は移民の送出においては差異がある。このような地域差が生じる原因を検討し、そこから華北社会の地域的多様性を解明する事が筆者の目標である。本稿は、その課題に接近していく初歩的な前提の作業として、この三つの時期に即して移住民の出身地の分布を考察し、その時期による出身地分布の変遷を明らかにする事を目的とする。

なお本稿では中国東北地方を「満洲」と標記するが、これは当時の呼称に従った。

一、清代中期から1900年代初

第一の時期は、北満への奔流のような流入が始まる前であり、南満つまり現在の遼寧省及び吉林省南部が人々の主たる居住地であった。満洲は明末清初の混乱及び清の入関によって空白化したとされる。順治年間から康熙年間に遼東招民開墾例（1653年～67年）の時期を経て満洲の人口は回復傾向へ転じた。そして康熙年間後半には多くの人間が満洲で活動していたようである。満洲は満洲族の故郷でありそこの漢化は避けねばならなかった。加えてそこで産する薬用人参、淡水真珠、木材など天産物を漢人の密採から守るという具体的な目的もあり、清朝は当初の招民例を廃して人口流入を制限する方向へと転じた。乾隆5年（1740年）以降、満洲には「封禁政策」が施行された。ここではこの詳細に立ち入らないが、結局は漢人の流入を押さえ込む事は出来なかった。旗人は既に耕作から遊離し、満洲は労働力不足の傾向にあった。そこで前稿で論じたように[6]、人々は禁例の影で頻繁に海路によって両地域を往復し経済活動に従事していたのである。それでも乾隆末年までは封禁政策は比較的厳しく施行されたといえる。だが結局嘉慶13年（1808年）に政策は手直しされ、奉天（今の遼寧省）へ

の流入をある程度容認し、辺外（今の吉林省・黒龍江省）を重点的に封禁するという政策に転じた。その後は封禁自体が議論の俎上にのぼる事も少なくなり、名目では清末まで継続されるものの、19世紀前半の道光年間以降は官地の丈放（払い下げ）が始まり封禁政策は実質上破綻した。

封禁政策の下での満洲移民については資料上の制約が大きく、その出身地を定量的に分析する事は出来ない。そこで零細な記述を積み重ねる事で大体の傾向を明らかにしたい。まずは筆者が前稿で用いたことがある漂流民の取調記録に着目する。勃海を渡って満洲と山東を往復する船は時として難破し風にあおられて朝鮮王朝の領域にまで吹き流された。朝鮮側がこれらの漂流民に対して行った取調の記録、「問情別単」という資料は移住民の実態を知る上で貴重な情報を与えてくれる[7]。清代を通じて満洲－江南－福建・広東をつなぐ交易路の一角に、勃海・黄海沿岸のネットワークが組み込まれていた。漂流民の中には南方から満洲へ貿易に来た商人も多数乗り込んでいた。資料の中から南方から貿易のみを目的として廻航してくるものを除き、山東満洲間で出稼や移民などを乗客として載せている船の事例を三つ紹介する。

①乾隆39年（1774年）11月、江南から山東を経て、そこで乗客59人、内訳男性43人、女性4人、子供3人を載せ満洲へ出帆したところ遭難して朝鮮に漂着した。この男性43人の内、11名は山東籍としか記されていないが、残りは全て登州籍である[8]。つまり最低でも男性客の74％が登州籍である。

②乾隆56年（1791年）11月、満洲から山東へ戻る船に乗船した客は、一行21人中、登州籍が19人、残る2人が奉天籍であった[9]。つまり90％が登州籍である。

③乾隆59年（1794年）11月、山東から満洲へ向かった船の乗客は合計44人、内訳男性37人、女4人、子供3人であった。その内登州籍が31人、奉天籍が13人であった[10]。つまり70％が登州籍である。②と同じくその余の者はすべて奉天籍である。

事例は三つだけだが海路にて満洲と山東との間を移動する人々の中では圧倒的に山東省登州府、すなわち山東半島出身者が多数を占めていた。

続いて満洲側に視点を移しそこに居住していた者の出身地に着目しよう。乾隆末年頃に著された博明希哲『鳳城瑣録』[11]に朝鮮国境と渤海に程近い鳳凰城について次のような記述がある。

「奉天の南は大海に濱し、金・復・蓋は登・莱と岸を対す。故に各属は皆山東人の拠る所と為る。鳳凰城は乃ち極辺、而して山の陬、海の涯に数間の草屋、数畝の荒田あり。之を問えば斉人が葺く所墾す所に非ざる無し。」

ここで山東半島の登州府・莱州府との位置関係に触れた上で、遼東半島の金州、復州、蓋州に居住する山東人について述べている事から、この山東人「斉人」は主に登州府・莱州府を出身としていた推測できる。これを証明するものとして1930年代前半に遼東半島の南半分の関東州にて居住者を対象に行われた来歴調査がある。その調査対象の153個姓の内、漢民族は120個姓、さらに移住年代を或る程度明らかに出来るのは76個姓であった[12]。その殆どが17世紀半ばの清初から18世紀前半の雍正年間までの移住である。さらにこの120個姓の内、106個姓については出身地が分かる。その内、登州府出身は81（76％）を占める。登州府下の各県については、それぞれ蓬莱が17、文登が16（大水泡が3）、福山が9、海陽が6、黄県が3、即墨が3、棲霞が2、牟平が1、高密が1、栄城が2、其他が2であった。なお莱州府は2であった。また1945年終戦直前に遼東半島中部の遼陽県の一村落で行われた調査では、

住民の殆どが登州府黄県出身であるという[13]。

だがここで検討した資料は全て遼東半島の事例である為に、登州府出身者が際だって多かったのかもしれない。山東半島と遼東半島は地理的に近接している上に海路によって密接に結びついていたからである[14]。乾隆11年（1746年）9月7日の張廷玉の上奏に

「奉天の南面、倶に海疆に係り、金復雄蓋四城の地方、山東の登莱両府と相対す。商帆人渡、不時に往来し、民人を私載するは、勢い免がるる能わず。」

とある[15]。乾隆36年10月8日の山東巡撫周元理の上奏には

「（登州府の諸県）南は閩浙江蘇に通じ、北は奉天に達す。南北の商船絡繹として絶えず。」

という記述がある[16]。また乾隆39年10月28日の盛京戸部侍郎徳風の上奏に

「竊かに照らすに、奉省の南大海に臨み、山東の登莱等の府と僅かに一洋を隔ち、片帆にて渡る可し。」

とある[17]。登州府は南北の海上交通の要衝に位置して満洲への交通が容易であり[18]、近接した地理関係から数多くの人々が二つの地域を往来していたので、遼東半島には登州府・莱州府出身者が数多く居住していたと考えられるのだ。

ここで山海関を隔てて直隷（河北省）に近接する遼西に目を向けてみたい。断片的な資料ではあるが、1780年に乾隆帝七十歳の祝典に参列すべく朝鮮王朝から満洲を横断して熱河に赴く使節に随行した朴趾源の日記『熱河日記』に興味深い記述がある。朴趾源は7月21日（新暦8月20日）に遼西の東関駅で登州籍の者と出会った。その内の一人、祝という老人は「いまわたしたちは、舟で金州（※遼東半島先端）へ行き、綿花を買って当地にとどまっております」と言った。また別のグループの三人連れの商人は、舟で金州、蓋州、牛家庄（※ともに遼東半島）へ行くという[19]。このように渤海沿岸の山東半島、遼東半島、そして遼西の間で活溌な取引がみられ、登州府出身の商人が活動している様がうかがえる。また第四節にて検討する文末附表－43から50にまとめた各村落は遼西及び熱河に位置し河北省に近接するにもかかわらず、その出身者は例外なく山東省出身者、中でも登州府出身が最も多い。おそらくは山東半島から渤海を渡って遼東半島へ、遼西へと赴くものが数多く存在したのだろう。嘉慶8年（1803年）『清實録』の記事には「向きに聞く、山東の民人奉天に前み赴くに、多くは海道由り行走す、之を陸路と較べれば、尤も径捷為り」[20]とある。海路での満洲入域は、陸路が山海関でのチェックを受けねばならないのにくらべて、より容易だったのである。海浜に面した登州府が満洲への移民に有利であった事は否定できない。ただし距離的遠近、交通の容易さが全てを説明しきれるものではないことをあらかじめことわっておきたい。これについては本稿の結論にて再論しよう。

以上の事例は、決して満洲全域の定量的な分析を可能とするものではない。だが19世紀半ば以前においては、満洲へ流入した者の出身地は山東省、特に山東半島の登州府が最も多く、莱州府がそれに次いでいた事には、傾向としての誤りはないだろう。

二　1900年初から1920年代

1900年代初から1920年代にかけての第二の時期に満洲、特に北満は大きな変動を被った。それは東

清鉄道（中東鉄道）の敷設による所が大きい。東清鉄道は満洲西端の満洲里から東端の綏芿河までを結び、中間のハルピンから垂直に大連まで南行、満洲をほぼT字型に縦横断し1900年に一部完工、1903年には営業が開始された。鉄道が満洲に与えた影響を詳細に論じた塚瀬進の研究に拠れば、この鉄道の敷設によって満洲の経済は刺激を受け、農業開発、商業化の度合いに大きな進展が見られたという[21]。これは必然的に関内からの移住民の流入を帯同するものであった。

当時の満洲に対しては日本とロシアが利権の拡大をねらい多大な関心を示していた。それを背景に多くの調査・研究が作成された[22]。その一つ守田利遠『満洲地誌』はロシア勢力下にあった北満に関する総合的な研究である。文献資料と当地居住の中国人への聞き取り調査に基づいた論述であり、その内容は地理学、歴史学、文化人類学および当時の政治経済まで広範囲にわたる。またこの地誌の類書にない特徴として、相当の紙幅を割いて北満に流入した山東人について言及している点がある[23]。ここではこの資料に依拠して20世紀初頭に開発の焦点として移住民を吸収していた北満地域を対象として、第二の時期における各地の山東人移住民の出身地について考察する。行政区分は資料では清末のそれに相応しているが、理解を容易にする為現在の省区分になおした。また北満洲全体を①黒龍江省西部（興安嶺）と内蒙古の一部、②黒龍江省中部（松嫩平原）、③黒龍江省東部（三江平原と東部国境沿いの丘陵地帯）、④吉林省中部及び西部（東北平原中部）、⑤吉林省東部（長白山系）、⑥内蒙古（北部の東清鉄道沿線は①に加えた）の六地域に分けた。さらに参考までにa．ロシア領アムール州、b．ロシア領沿海州の山東人にも言及する。山東各地の出身者の割合をまとめたものが表1である。残念ながら山東省以外の地域については不明である。またこの調査自体が感覚的であり実数については分からない。それでもある程度実態に即しているものと考えてよいだろう。実数の多寡はそのまま信頼する事は出来ないが、そこにある地域の出身者が存在するか否か、Aという集団に対してBという集団が多いか少ないかについては充分に信頼してよいだろう。なおこの地域区分は本稿第四節でも⑦遼寧省東部と⑧遼寧省西部及び熱河を追加して使用する。

①黒龍江省西部及び内蒙古北部

この区分に所属する地域は守田利遠『満洲地誌』第八編「満蒙西伯利亜と山東人」所載の限りでは興安嶺、海拉爾、満洲站（満洲里）、愛琿地方の四つである。それぞれについて見ていきたい。

「興安嶺地方。……山東出稼者の入境は光緒二十年五月にて其以前同地方は山西商人の已に入込み商業を営む者あり。山東人は露国の鉄道敷設開始に方り数多の苦力集中せしを始とし其後年々歳々同地方に集り来り。現に山西人を除けば山東人最も多し。原籍は登州府、莱州府、及青州府属のもの多し。此外直隷省、天津、保定府のもの又多し。而して之等の山東人中の多数は皆鉄道工夫として入込み其貯蓄を資本として飲食店等を営むもの等にて未だ勢力のあるもの少し。」

「海拉爾地方。山東出稼者の入境は今より二十余年前にて其以前同地方は山西省人の已に入込み銭荘を業とするものあり。山東人は露国の鉄道経営に方り、多数の苦力の輸入したるに始り、最も盛に同地方に集中せしは光緒二十七年頃にて現に山西人を除けば山東人最も多く亦勢力あり。原籍は莱州府及登州府属のもの最も多し。」

これらの地域の開発の先鞭をつけたのは山東人ではなく山西商人であった。これは他の多くの地域とも共通する。ここに山東からの出稼が入ってきたのが1870－80年代である。比較的大きな都市である

表1　満洲及びシベリアに於ける山東人配布比例表

地理区分		済南府	東昌府	泰安府	武定府	臨清府	兗州府	沂州府	曹州府	済寧府	登州府	莱州府	青州府	合計
①	満洲站地方	50									50			100
①	興安嶺地方										40	30	30	100
①	海拉爾地方										50	50		100
①	愛琿地方										50	50		100
②	齊齊哈爾地方	50									20	20	10	100
②	呼蘭府										40	30	30	100
②	綏化府地方										50	30	20	100
②	哈爾賓地方	20						10	10		20	30	10	100
②	双城堡地方	30						40			20	10		100
②	伯都訥地方										60	40		100
②	賓州地方	100												100
②	長壽県地方	100												100
②	五城庁地方											40	60	100
③	寧古塔地方	20	10								30	20	20	100
③	三岔口地方										50	20	30	100
③	三姓地方										50	50		100
③	興凱湖畔地方	100												100
④	長春地方										40	30	30	100
④	農安地方										40	40	20	100
④	万金塔地方										70	20	10	100
④	吉林地方										50	20	30	100
④	伊通州地方										40	20	40	100
⑤	磨盤山地方	20									30	10	40	100
⑤	敦化県地方	30						10			40	10	10	100
⑤	額木索地方										50	50		100
⑤	琿春地方											70	30	100
⑤	延吉庁地方	40									20	20	20	100
⑤	間島地方										40	60		100
⑤	長白山中	30							10		40	10	10	100
⑥	双龍鎮地方	50										20	30	100
⑥	多倫諾爾地方	40	10	10	40									100
⑥	庫倫地方										50	50		100
⑥	甘吉廟地方	50											50	100
a	ゼーヤ										50	50		100
a	レイノワ											100		100
a	ブラゴベシチェンスク							50			20	30		100
b	ニコライスク				40						40	20		100
b	ハバロフスク										40	60		100
b	烏蘇里地方	40									20	20	20	100
b	双城子地方		40								40	20		100
b	ウラジオストク										60	40		100
b	アレキサンドルフスキー										60	40		100
b	ポグラニチナヤ										40	60		100
b	ポセット										40	60		100

資料：守田利遠『満洲地誌』丸善、1906年、第八編「満蒙西伯利亜と山東人」。

海拉爾は先行したが、興安嶺の山地はやや遅れて1890年代に流入が始まった。このような僻地に人々が流入するようになった理由は、東清鉄道が興安嶺を横断して建設され労働力が必要とされた為である。調査時の1900年初頭には先行した山西商人を凌駕して山東人は多数派となっていた。表1によると登州府が多数を占め、それに莱州府が続いている。つまり前節で見た第一の時期と同じ傾向を窺い知れよう。だが満洲站（現在の満洲里）はいささかその趣を異にする。

「満洲站地方。該地方に多数の山東出稼者を誘致したるは光緒二十三四年露国が鉄道経営を開始したる後にあり。出稼者の重なる職業は始め鉄道工事に従事したる苦力なるが、其或るものは露語に熟するを以て露国通事となり、其或るものは多少の資本を得て露清人間に商業を営むものを

生じ、現に近年に至り益々隆盛に赴き「イルクーツク」地方より同地方に輸入する貨物年額一万銀に上り、同地方より蒙古物産の輸出は如上輸入高に二三倍するを常とす。而して之等は何れも山東出稼者の成功したるものにて、其重なるものを挙ぐれば済南府及登州府人にて福永昌、六合長等の大商店及中小商舗四十余戸を成せり。此他山西人も亦少なからず。」

ここは西部国境に接する僻遠の地である。最初は鉄道建設の労働者が、続いて対ロシア貿易に従事する商人が来住した。当地は満洲・蒙古の物産をロシアへと輸出する中継点として繁栄しつつあった。従来の辺境が逆に交易で有利な立場におかれ飛び地のように発展するケースは、この時代の満洲の特徴である。俗に言われるように南から北へと波状的に開発前線が拡がっていったのではない。満洲站でも登州府が半分を占めているが残りを莱州府ではなく済南府が占めている点に注意せねばならない。

「愛琿地方。……同地方に始めて山東移民を誘招したるは光緒四五年頃、齊齊哈爾地方より漸次入境し開墾に従事し、農耕の余黒龍江、嫩江等に漁業を営みしもの少なからず。何れも山東莱州府登州府のもの最も多く、此外には奉天府属錦州辺のもの多し。(※義和団事件の後)……一時移民の跡を絶ちしが近年に至り再び徐々に入境するものあり。之れ元来同地方は清露国境に於ける陸路通商貿易通路に当れるを以て対岸「ブラゴウエチヘンスク」の繁昌は自ら出稼者を吸収すべき位置にあり。……。山東人の同地方にあるもの主として交易に従事し三年乃至四年毎に其儲財を齎らして帰郷するを常とす。」

愛琿には1870年代より移民の流入が見られる。ここの繁栄もまた黒龍江を挟んで対峙するロシア領アムール州ブラゴベシチェンスクの発展に牽引されたものである。一般にロシア極東の諸都市は北満の都市に先んじて成長し、ここへの食糧供給等の為辺境部の開発が進展したという側面も看過できない。表1によれば山東半島の登州府・莱州府出身者で占められていた。

②黒龍江省中部

当地は東北平原の北部、松花江と嫩江の交わる平原で構成される。満洲の中でも最大の穀倉地帯であり、流入する移住民の目的は農業にあった。満洲農業は一年一作という条件に規定され、除草期と収穫期に著しい労働力不足に陥る。そのため多くの出稼がこの労働力不足による賃金の高騰に引き寄せられ雇農としてここを目指した。また域内には北満最大の都市であるハルピンとチチハルが存在する。後者は東清鉄道からやや外れているが(最寄り駅は昂昂渓)、その影響を大きく受けて北満有数の都市に発展した。

「齊齊哈爾(※チチハル)地方。山東出稼者の入境は今より四十年前姓劉なるものを先達とし歴年愈聚り愈多し。之等農工商業を併有し、山西其他各省の人ありと雖も山東人最も多し且つ勢力あり。原籍は済南府、登州府、莱州府及び青州府属のもの多し。其他直隷省保定府、永平府及山西、湖南、湖北、山海関内のものあり。而も大半は山東人なり。……。(※同地で結婚した儲財者の)此他は毎年若くは二三年に一回帰郷再行を常とす。」

チチハルには調査時より40年前(1860年代)に移民が出現した。出身地の構成は満洲站と同様、約半数の山東人が済南府出身である。その残りを山東省東部の登州府・莱州府・青州府出身者が占めていた。北満最大の都市ハルピンは鉄道建設以前は寒村にすぎなかったが、敷設後は南満支線への分岐点

として成長を遂げた[24]。

「哈爾賓（※ハルピン）地方。初め該地方に山東出稼者を誘致したるは今より七八十年前にして其目的は開荒耕種にありしが、後光緒二十三年頃より露人の入境して諸般の経営を創刱するに及び益々多数の出稼者を輻輳し、現に同地方にある山東出稼者には莱州府掖県、昌邑県、平度州及登州府属黄県のもの其過半を占め、此他済南府、青州府、沂州府、曹州府属のものあり。其多数は今尚お春往冬帰一年の稼溜を齎して越年の為め山東に帰省するものにて、変じて馬賊になり居るものには曹州府、沂州府属のもの其大半に居り。」

ハルピンには1830年代に移民の流入が始まった。登州府と莱州府出身の者が半数を占めているが、その他の地域出身の者も存在している。一般的には農村部では登州府と莱州府が他を圧倒し、都市部ではその他の地域出身者がこれに拮抗するという様相を呈している。ただし賓州と長寿県は例外である。

「賓州地方。山東人貧苦の余出稼者として該地方に入りしは今より二十余年前にて其目的は開墾農耕にあり。又行商として来り漸次土着せしものあり。山東人中済南府属のもの最も多く、此他山海関内のものにして移民中土着せしもの十中一二に過ぎず。」

「長壽県地方。此地方に山東移民を誘引したるは瑪延河流域平原の土壌佳良にして穀糧を出すこと盛なりしに因す。初めて多数の出稼者を出したるは東清鉄道敷設後とす。又既往農耕者にして他省の蓄財を得て同地方沃野を買佔土着したるもの亦少なからず。其出稼者の原籍を府県別にすれば済南府、章邱県長山県及鄒平県歴城県下のもの等其多きに居る。」

ここは表1によれば済南府出身者がほぼ100%を占めている。この理由は定かではないが次のように考えられよう。一般に移民は先行する同じ血縁や地縁の者に頼って移住するというパターンをふむ。当地では先行する済南府出身者が移民を呼び寄せ、それが雪ダルマのように拡大していったものと考えられる。ただそれでも登州府と莱州府が存在しない理由は不明である。おそらくはいくらかは存在したであろうが、それにしても済南府出身者の優位さは確かであろう。以下は平原の穀倉地帯内各地方の詳細である。

「呼蘭城地方。山東出稼者の入境は今より凡そ八九十年前、青州府人にして姓沈と呼ぶもの来りしを始めとし、今尚お沈家窩棚と云うものあり。其後年を経て漸々集中し来り一般出稼者の原籍は登州府莱州府及青州府属のもの多し。而して之等の山東人は皆農夫なり。」

「綏化府地方。該地方に山東人出稼者の入境したるは今より三十年前、山東の凶歳に因り登州府人王松なるもの逃れて該地方に来り開荒農業を創め、下て光緒十五年頃に至り続々入境者を増加し後、鉄道の開通するに及び益々山東人の移住を促し以て今日の優勢を来せり。原籍は登州府、莱州府、青州府属のもの多し。其他は山西直隷省のものを交ゆ。」

「伯都訥。伯都訥地方に最初山東人の入境を見しは今より数十年前にして、之等は家居するも生を計る能わざるより同地方に至り、開荒に従事し農業を営み、又は満洲旗人に雇われ或は幇耕と称し、農業組合を以て漸次其地歩を進め、遂に今日同地方の商業は大部山東人の手に帰するに至り居れども、其初めは商業に従事するもの稀なりき。其出稼者原籍地名を挙ぐれば山東省登州府平度州莱州府掖県人等を主とし一部の河南人を交ゆ。」

「五城庁地方。……初め該地方に山東出稼者を誘いたるは今より五十年前にして、貪瘦零落の徒、

同地方山中に於て人参を発見し一握千金の冒険的出稼を試みたるに起源す。現に四合河一面坡の如きは今尚お採参を主業と為すもの多く、農業者は其半に居る。又曩年東清鉄道の敷設は多数の山東苦力を鉄道線路上に持来したるも、之等は居住不定にして随来随去の状ありて地方一帯満洲人以外殆んど他省人を混ぜず。純然たる山東人の部落と見て大差なしと云う。該地方山東出稼者の先声とも称すべきは登州府海陽県人于姓及青州府周姓なるものにて、従て同地方に於ける出稼者は青州府及登州府属のものを主とし膠州、高密、即墨県人等之に次ぐ。」

これらの地域でおおむね19世紀の半ばに開発が始まった。五城庁では青州府が登州府・莱州府を追い抜いて最大のグループを形成している。これは当地方への出稼の先鞭をつけたのが青州府出身の于という姓の者だった為という。また、

「双城堡地方。……初め該地方に山東出稼者の入込みたるは今より五十年以前にして、開墾耕種に従事し漸次員数の加わるに随い、小商人及諸工匠を加え、後光緒二十五六年頃露国の経営に係る鉄道工事に伴い益々多数の出稼者を誘致し、……、之れ等出稼業の原籍地を挙れば沂州府属蘭山県、済南府属章邱済陽県人多く、此他登州府莱州府の人等あり。而して他省出稼者の最たるものは山西、湖南、湖北人あるも員数に於て山東人最も優勢なりとす。」

とある。このように双城堡がハルピンやチチハルと同様に済南府と沂州府の混在を特徴とするが、その他はすべて山東半島の登州府・莱州府そして青州府の出身者が主流となっている。ただし全体としては当地域では済南府出身者が無視できない位置を占めている事を改めて指摘しておきたい。

③黒龍江省東部

当地は対ロシア国境に沿った小興安嶺の山地・丘陵地と三江平原を地勢上の特徴とする。松花江流域はつとに開発されていた。当地の三姓は松花江と牡丹江の分流点に近く、清朝の辺民制度の中心として三姓副都統衙門がおかれていた。

「三姓地方。初めて山東人の此地方に到りしは百余年前なりと、其初は伐木狩猟を業としたるものの如し。多数出稼人入境せしは僅々二三十年前の事に属す。現に三姓地方にある山東人は登州府黄県人最多く、莱州府掖県、昌邑県人等之に次ぐ。……。山西人山海関内人の土着せる者多し。概言せば同地方に於ける山東人の勢力比較的大ならず。」

三姓は、山東省外出身や満洲族が多い為に、他地域にくらべれば山東省出身者の勢力が大きくなかったという。三姓の建設は18世紀に遡る。これらの山東省外出身者は古くからの居住者、土着者と考えてよいだろう。ここから南に牡丹江を遡ったところに寧古塔がある。

「寧古塔地方。同地方に多数の山東移民を招致したるは光緒二三年頃吉林分巡道たりし呉大徴が辺防を策し地方拓殖を開始したる時に濫觴し、出稼者の多数は登州府、莱州府、青州府、済南府、東昌府属の者にて、其最初の目的は開荒耕種の業に在りしも、後露国の鉄道経営は益々多数の苦力を輸入し、其勢力寧ろ既往の農耕者を圧するに至り、現に同地方に在て比較的成功者と称すべきものは前者にあらずして後者にあり。」

これらの地域では、開発の歴史が古くとも本格的に移住民が流入してきたのは19世紀後半になってからのことである。表1によると山東省の中では登州府・莱州府が主流であるが、三割は済南府と東昌府という山東省中部・西部の出身者が占めている。

「三岔口地方。……同地方に始めて山東人の入りしは同治二年頃にて、愈々多数の移民を招致せしは今より二十七八年前にあり。目的は始め淘金を業とし或は拓殖伐樹採等より次で露人の鉄道敷設工事の為め多数の苦力を輸入したり。出稼者の多数は登州、莱州、青州等三府属の者にして内最も多きは莱州府掖県人多し。此他直隷省保定府人を混ず。……。同地方の山東人は店舗家屋を有せるものと雖ども大半は年々帰郷す。同地方に於て成功したるものは登州府寧海州人にして李文登、莱州府即墨県人にして許永和と云うものあり。」

「興凱湖畔地方。興凱湖の北岸より穆稜河下流右岸に沿える一帯の地方は光緒二三年の頃より漸次流民の麕集開墾する地域となり、……。移民の大部は山東省済南府属歴城章邱県人なりと云う。」

これらの黒龍江省東部への移民には農業と並行して伐木や狩猟、天産物の採取、採金業に従事する者が含まれるという特徴がある。その出身地は多彩であり登州府が中心だがところによってはそれ以外の地域も優位に立っていた。一般には、この地域のように19世紀後半に大量の移民を引き受けるようになった新開地や非農業移民の多いところでは、登州府・莱州府以外の地域の出身者が多いという傾向がある。

④吉林省中部及び西部

ここは東北平原中部であり、同省の中心地、吉林と長春を域内に含む。開発の歴史はやや遡り18世紀半ばから19世紀初頭に始まる。長春は元来蒙地との交易で栄えたが、ハルピンと同様南満支線の建設によって急成長した。

「長春地方。……其初め耕穡の目的を以て山東移民の入境したるは今より百年以前にて、地方に依り各々出稼者の先声をなすものあり。……。而して之等長春地方に於ける山東移民の府県別を挙ぐれば登州府黄県、莱州府昌邑県、掖県、青州府属諸城寿光の二県、濰県即墨県等のもの多く、此他直隷河間府及山海関内のもの亦少なからず。出稼者の主業は農業にあるも、露国の鉄路経営以後大部は其苦力たり。又同地方にては従来より織布業を営むもの多く、又商人にて有力なるものを生じ、既に土着永住の計をなせるもの少なからず。」

当地は登州府・莱州府・青州府出身者のみで構成されていた。つづいて松花江沿いの吉林は鉄道敷設以前はこの地域の陸運・水運の中心であった。

「吉林地方。……山東人の当地方に来りしは今より七十年前にして其目的とする所労働及農業とす。山東移民の府県別を挙ぐれば登州府、莱州府、青州府属のもの其大部を占め、就中黄県、蓬莱、海陽諸県のもの最も多し。山海関内山西人亦少からず。出稼者の主業は農にして手芸者之に次ぐ。山東人の該地方に在りて蓄財成功せるものは帰郷せず。此地にありて満人と結婚家居するものあるも、之等は百人中一二に過ぎず、大部は年々帰郷す。満漢人皆声気を通じ商賈慶弔等倶に往来す。」

当地においてもまた長春と同様居住者は登州府・莱州府・青州府出身者のみであった。その内半島北部の黄県と蓬莱県が特記される。

「農安地方。……其初め耕穡の目的を以て山東移民の入境したるは今より六十年以前にて地方に依り各出稼者の先声をなすものあり。……。而して農安地方に於ける山東移民府県別を挙ぐれば登州府黄県、莱陽県、海陽県、莱州府掖県、昌邑県、濰県、高密県、膠州、即墨県、平度州、青

州府等のもの多く、其他山海関内のもの亦少なからず。出稼者の主業は農業にして手芸者之に次ぐ。同地方の商業は極めて小取引にして直接山東と連絡を有するものなし。」

「万金塔地方。……山東人初めて開荒の目的を以て当地方に来りしは約百年以前にして今山東移住民の府県別を挙ぐれば登州府黄県、莱州府掖県、濰県、昌邑県、平度州、青州府壽光県等の者多く、此他直隷省人少なからず。」

「伊通州地方。此地方に盛に山東人を誘致したるは今より二十五年前にして其目的とするは之れ囲場開墾にあり。山東移民の府県別を挙ぐれば登州府、青州府、莱州府の昌邑県、濰県、諸城県にて他省人なく、山東にして此地にあるものは初め自己の開拓せしものに係り、比較的帰郷を想うもの少し。」

以上の地域でも例外なく山東半島出身者が中心を占めている。これに基づいて判断すれば、総じて開発の歴史が古いところは山東半島出身者が数的に優位に立っていると考えてよいだろう。

⑤吉林省東部

吉林省東部はおおむね吉林以東の山地丘陵地帯である。広大な森林に覆われ清代前半には囲場として伐木を禁じられていた。衣住民達はこの囲場の開墾、伐木を目的とした。なお朝鮮国境沿いには19世紀後半より朝鮮半島北部の住民が流入し第一のエスニックグループを形成し、ところによっては漢民族との混住社会が出現していた。ここは吉林省中西部にくらべて開発の始まりがやや遅い。

「琿春地方。此地方初めて山東人の入りしは今より八十余年前、登州府人姓王なるもの同地方へ流浪し来り、遂に此地に留りて鍛工を業とせるに初まる。其後登州府、莱州、青州府属のもの漸次入り来りぬ。就中黄県、昌邑、掖県人最も多し。又湖南、湖北、直隷各省人等官吏の縁故を以て来往せるものあり。」

「敦化県地方。……同地方に始めて山東人の入りしは将に百年以前のことに属し重に拓殖に従事せり。大黄溝の如きは目下数百の山東人あり。其等は登州、莱州、済南、青州、沂州府属の者多数を占む。」

「延吉庁地方。……同地方に山東出稼人の入りしは已に五十年前なりと、皆墾地以て農に従事せり。其原籍は済南、青州、莱州、登州各府属のものにして殊に歴城県、掖県、諸城県、日照県の人最も多し。其他朝鮮人極めて多く、何れも農夫なりとす。」

「間島地方。……山東人の盛んに間島内に入込みたるは今日より三十年前にして其原籍別は登州府属の各県人及莱州府属昌邑県、平度州、莱陽人等多く、膠州人も亦少からず。」

国境沿いの琿春は莱州府出身者が最も多く、延吉の山東人の四割が、敦化の山東人の三割が済南府出身であった。

「長白山中。長白山中に於ける山東移民の増加したるは最近の事に属し、其初人参の採取に起り続て伐木淘金に従事し、……。」

薬用人参採取や採金など非農業移民が中心であり、移民の流入も極最近（1880－90年代）の事に属す。当地の山東人は各地の寄せ集めの感が強い。

「磨磐山地方。……山東人の当地方に来りしは今より二三十年前にして其目的とするは囲場（天子の狩猟場）の開拓及大半小商賈人等とす。移民の府県別を挙ぐれば登州府、莱州府、青州府属

の諸県人多く、其他天津及山海関内等のもの之に次ぐ。」

「額木索地方。……同地方各省人の集合せる所なるも、山東人の多きに及ばず。……。山東多数の出稼人は登州、莱州二府属のものにて殊に昌邑、平度、掖県、即墨県人等最も多し。独り通溝鎮付近には沂州府人の集合せるを見る。」

以上二つの地域では、額木索の一部で沂州府人の集住がみられるが、概ね山東省登州府莱州府の優位さは疑うことができない。ただし全体として吉林省東部を検討すると、黒龍江省ほどの分散性は見られないものの、山東半島人の勢力は吉林省中部のそれには及ばない。

⑥内蒙古

蒙地の開放と開発は20世紀初以降本格的に進行した。双龍鎮などは調査時にまさに移民の流入が始まろうとしていたところである。

「双龍鎮地方。……光緒二十九年に至り奉天将軍増祺の上奏に依て招民墾拓することとなり、行局総辨試用知府張沁田及該地蒙古人協理台吉等と協同踏査せしめ、洮見河岸に於て南北約百三十清里、東西約一百清里を限り開墾地域と定め、現に懐徳、鄭家屯方面の旧移民及山東人の新移住者を併せ漢人二百余戸を集団し、東部蒙古の中腹に盛京省属の新開地を作し、遂に光緒三十一年陞して府治を置き、洮南府と名け、元奉天交渉局総辨孫葆瑨を移し、該地に知府たらしめたり。即ち近来に於ける蒙古開発に先鞭を附したる所にして尚お進んで阿爾科爾沁、扎賚特地方を開拓せんとし、目下調査中に係るもの少からざる由なり。……。而して該移住者の原籍地を挙ぐれば山東省済南府及青、莱二府のものを主位とし直隷河間府のもの之に次ぐ。其主位已に山東人にして何れも土着の傾向を有し、且つ苦憂少き天然の楽境なりと称し居れば、今後山東移民の輻輳想見するに堪えたり。斯くして東部蒙古も亦山東人を以て充満するに至らんか。」

「多倫諾爾（※ドロンノール）地方。……土民の大部は蒙古人にして山西人之に次ぎ、山東人は第三位に居るの有様なるが、数年前迄は此地山東人僅に四五戸を有し、有名なる該地喇嘛廟の開廟期に於て餡餅を鬻ぐを業とするが如き極めて可憐なる状態にありしに、近年に至り蒙古内地に於ける金鉱、石炭、白鹻、青塩等の露人若くは独乙人等に依て探見せらるるに及び漸く山東苦力の需用を増し殊に戦時中は是等山東人は露国後方勤務の幇助に任ずる希臘人猶太人等の手先となり他倫諾爾を仲継地として天津方面より軍需諸物資を輸入して海拉爾に送り比較的重利を収めたるものあり。之等は山東西部武定済南府地方の苦力上りの商人にして、戦後尚お同地方に止りて開店を継続するもの次第に増加し、今後は煙草、布疋、綢緞等を輸入して蒙古土産の羊毛等の外輸に任ぜんとしつつあり。」

「庫倫地方。……一般商業の重なるものは綢緞、茶、布疋の輸入及毛皮類の輸出に在り。商人中有力なるものは山西人にして人数に於ては直隷人首位に居り、山東人に至りては人員富力共に第二位を占め居るが、殊に登莱二府のもの多く、山東商人の主業は日本雑貨、煙草、鴉片等の輸入及飲食店、旅人宿を開業せるもの多し。」

「甘吉廟地方。該地方未だ山東人の入住土着せる者なきも、他倫諾爾及び海拉爾に根拠せる山東商人は綢緞、玉器、麺粉、酒、茶、砂糖等を齎し来り交易するもの近年益々盛にして以前は商取引の大部が山西人の手に帰し居りしが、今や山東人の勢力は漸次上進し来りつつあり。之等山東

商人は重に済南府歴城県、青州府周村鎮のものに係ると云う。」

ドロンノールはここ数年で山東人が大量に流入してきた。これらの地域では出身地は雑多である。登州府出身者の存在感はあるが満洲の他の地域のように圧倒的優位にはない。先にも述べたように、新たに開発が始まったフロンティアに登州府・莱州府以外の地域、特に山東省北部の済南府出身者が見られるのは興味深い。

以下は現在のロシア領に流入した山東人についての記述である。周知の通り1858年、1860年に黒龍江以北とウスリー江以東の土地がロシアに割譲された。だがこれは中国人の北進をやや押しとどめる程度であり、確かに土地獲得などには強い制限が課せられていたけれども、19世紀末には中国人は当地域に多数来住していた。彼らはスラブ系、朝鮮系に次ぐ第三のエスニックグループとしてここに基盤を拡大していた。

a. ロシア領アムール州

黒龍江以北のアムール州はブラゴベシチェンスクを首府とする。義和団事変に際して黒龍江北岸の飛び地の江東六十四屯はロシアに併呑され、華僑に対する虐殺事件も発生したが、混乱の収拾した後には再び中国人の進出が始まった。

「ブラゴベシチェンスク。山東出稼者の入境は光緒二十年頃遷移して此地に来り、淘金を以て業となす。同二十三年露国の東清鉄道敷設開始に方り、商人陸続として集中す。原籍は沂州府属及莒州のもの多し。而して之れ等の山東人は商業を営むもの多く之に亜で淘金者なり。」

「「ゼーヤ」河金鉱。該地方に山東出稼者を持来したるは今より五六十年前にして入境の目的は砂金採取にあり。現に同地方にあるものは山東省登州府属招遠県、黄県、莱州府属掖県、昌邑県平度州のもの尤も多く、此他直隷省山海関内のものあり。」

「「レイノワ」金鉱。……該金苗の発見は、今より三十年前に於て初め清人の採掘に係りしが、一朝露人の専估に移りてより多数の山東人を吸収し、全脈に亘りて現下千五百人余の淘金者を使用せり。」

表1によればここは登州府と莱州府が中心となっているが、ブラゴベシチェンスクに限れば半分が沂州府出身、残りを登州府と莱州府で分けている。

b. ロシア領沿海州

当地はウラジオストクとハバロフスクという極東の大都市を擁する。

「浦潮斯徳（※ウラジオストク）地方。……該地方に多数山東人を誘致したるは光緒十三年頃にして、其目的は初めは海産物採取にありしが、後露国諸般の経営に対する需用に応じ、目下は重に商業を営むに至れり。然れども今尚刁畢河一帯にあるものは開墾を業とするものあり。出稼者は莱州府、登州府人其大部に居り、其他は到底及ばざること遠く、朝鮮人韃靼人蒙古人及直隷省河間保定永平等の三府人及少数の南清人あり。其勢力山東に及ぶものなし。」

「ハバロフスク。該地方に山東人の始めて出稼をなしたるは今を去ること三十年以前にして、多くは山東の貧瘦にして生活に苦むより移遷し来る苦力にして、労働を目的とし、多少の資本あるものは露清人間に小商賈をなし、漸次今日の盛運に及びたり。同地に於ける山東出稼者の先声者は前者にあらずして後者にありとの説あり。山東移民中就中登州莱州両府を最多とし、此他直隷

山西人を交ゆ。……。該地より山東へ向け為替の取組み自由にして送金は全く露清銀行に由る。」

1870年代以降極東ロシアの開発の進展につれて当地への流入が本格化している。これを加速させたのが東清鉄道とウスリー鉄道の建設であった。

「ニコライスク。該地方に山東出稼者の増加したるは浦港開港以後に係り、殊に浦塩「ハバロフスク」間に烏蘇里鉄道の完成を見たる後は前往者を趁うて同地方に出掛くる山東商人相踵き、……。其府県別を挙ぐれば登州府招遠県、蓬莱県、莱州府掖県、莱陽県、黄県、武定府浦臺県のもの其多数に居る。……。其帰郷せざる出稼者の貯財は上海を経て露清銀行手形に依て安全確実に送金するを得。」

「烏蘇里地方。……山東人の初めて此地方に移来せしは光緒二十年後にして済南府章邱県王金爐と云える人最先に此地に至り、露国鉄道敷設に際し伐木を以て成功し、次第に郷党親族を招致し以て今日に至る。故に同地方出稼者多くは済南府属のものにして、莱州府属のもの之に次ぐ。此他登州府属のものあるも多からず。」

「ニコリスク（※双城子）地方。該地に山東人の創めて移住せしは今より五十余年前にして当時の目的は農業にあり。後烏蘇里一帯に於ける露国経営は益々山東苦力を需用し、遂に今日の盛況に達したり。移民の原籍は登州府及東昌府属のもの多く、就中昌邑県、濰県、蓬莱県、掖県、棲霞県、莱陽県、黄県のもの最も勢力あり。山西、湖南、湖北の各省人及び奉天山海関内関外の人あれども多からず。山東移民の多数は春来り冬去る。恰も鴻雁の節を違えざるが如し。」

「アレキサンドルフスキー。……今より二三十年前浦塩方面に横溢したる山東出稼の一部は進で之等の地方を侵占し、既往の韓人及魚皮韃靼人等と同協一和して耕穡に生活するに至り、……。山東人には登州府招遠県及莱州府掖県のもの多く、……。」

「ポグラニチナヤ地方。此地方に初めて山東人の入境せしは烏蘇里鉄道の敷設工事時代にあり。現に山東人の此地にあるもの尚お苦力を脱せず、皆露人の為めに労働を目的とせり。近年少数の小商人あるも未だ勢力なし。移住者の大部は登州府、莱州府属のもの多く此地方には朝鮮人満人韃靼人等多く、出稼山東人は年々収得を以て郷里に帰るを常とし、永遠居住の目的なきが如し。」

「ポセット。……山東人の同地方に至りしは光緒の初年にして琿春方面に清国の招民墾地の事業起り漸次商業を営むものを生じ、次で彼等は韓人部落の需用に応ぜん為行商をなし、同地方に赴き後、露国の同方面に対する経営に参与し潤利を得たるものにして一部は殆んど土着の状態をなし居れども、未だ純然たる韓人の如き帰化人を見ず。其原籍の府県別を挙ぐれば莱州府掖県、平度州、登州府、莱陽、黄県、膠州、即墨県人等とす。」

当初は海産物の最終などが目的であったが、都市では商業、それ以外では農業といった業種に集中していった。これはとりもなおさず当地域の都市住民への食料生産、そして供給の任を中国人が担うようになったからに他ならない。ニコライフスク、ウスリー、双城子では、山東半島以外の地域の出身者がそれぞれ四割を占めている。

以上の資料の分析から山東人の出身地について次のような指摘が可能だろう。基本的には第一の時期と同様登州府の存在感は大きい。加えて山東半島の莱州府及び半島の付け根にある青州府出身者もまた相当の割合を占めている。つまり山東省の東部、山東半島が他の地域を圧倒している。だが一部

地域では済南府などが一部の地域で無視できない割合を占めている。たとえば第一にチチハル、ハルビン、寧古塔などの都市を挙げる事ができよう。これらの都市は建設の時期こそ異なるが、鉄道の敷設に伴い急速に成長、膨張しており、人口を吸収していたのである。第二にハンカ湖や満洲站や長白山などの辺境地帯、ロシア領内、さらに開発が今まさに始まった蒙地がそれに当たる。すなわち19世紀末から20世紀にかけて新たに開発が進み人口を吸収していたところに、山東半島以外の地域の移住民が流入していく傾向にあった。つまり時代がくだるにつれて山東半島以外が増加した。表1より推測できる事だが、山東省北西部の済南府がその地位を高めているのである。これが第一の時期との相違点である。

この点についてまた別の資料より接近してみたい。表2、3は1910年代の撫順、本渓湖両炭坑の労働者の出身地をまとめたものである。表2は1913年から1918年までの調査による。

「大正六年（※1917年）は山東省西南部地方一帯旱魃の為め収穫不良なりしを以て出稼苦力相当に多く、撫順炭坑に於ても例年の記録を破りて約八千名の募集を為し得たるも、下に記述する如く英仏行苦力多大なりし為め来坑苦力の実質大に低下の傾向ありとて、当局者の憂慮少なからざりしが如し。亦同省淄川炭坑にありても英仏行苦力募集の影響を受け来坑人員減少し、九、十両月の如きは出炭高甚だしく減少せりと云う。」[25]

第一次大戦中のヨーロッパ西部戦線への華工派遣に労働力がとられ、労働者募集が困難になった為、表2のように労働者数がしばしば7000人台を割り込んでいる。ところが反対に山東省南西部で発生した災害はここからの労働者を一時的に増やしているようだ。それは済寧府金郷と曹州府の鉅野の数字の変動の大きさに反映されている。莱州府の即墨がコンスタントに其の数を一定程度維持しているのは、先行する同郷関係を頼ってくる者がいるという事情と、把頭（労働者頭）が募集に行くという事情も勘案せねばなるまい。

全体としてみた場合、即墨の数字が大きすぎるが、もともと山東半島（莱州府）に山東省北部の済南、中部の泰安、半島付け根の青州が炭坑労働者の供給地と考えられた。ところが1917年以降直隷（河北省）出身者及びこれまであまり見られなかった山東省の西部（東昌府）と南部（曹州府、済寧府、沂州府）出身者がその数をふやしている。表3は1917年の本渓湖炭坑の労働者の出身地である。ここは当地出身の労働者が多いという特徴があるが、外地出身者に注目すると、多数派は山東省出身であるものの、直隷出身者も無視できない割合を占める。これは表2の山東と直隷それぞれの出身者の比率にほぼ対応しているように見える。

表4は1919年末から20年4月にかけてと23年に行われた調査によるものである。前の期間に満洲に入域した者は39万8090人である。その内、山東省出身者が37万2000人、直隷（河北）省出身者が2万6090人とされる[26]。また1923年に行った調査では山東省の人間は約35万人が入境したとされる。これらの表は山東省内部の出身地を見たものであるが、ともに山東半島が最も多いという。だが山東省北部の小清河流域から満洲に赴くものもまた決して少なくない点は留意せねばならない。

このように1900－20年代に移住民の出身地は拡大し山東省北部出身者が明らかに増加しているのである。さらには、ここに新たに山東省南西部の出身者も加わろうとする傾向も見出せる。

表2　１９１３－１９１７年撫順炭坑労働者出身地

		1913年10月	1914年9月	1916年6月	1916年10月	1916年12月	1917年4月	1917年8月	1917年11月	1918年4月
莱州府	即墨	2162	1924	1636	1503	1585	1607	1507	2079	2396
青州府	博山	298	246	433	407	536	428	487	552	388
青州府	益都	63	66	63	84	113	114	121	245	153
青州府	濰県	92	103	92	89	92	61	50	138	94
青州府	安邱	56	78	78	82	144	67	81	116	116
青州府	臨朐								142	90
済南府	淄川	362	450	421	421	483	450	488	421	384
済南府	章邱	79	107	104	118	90	159	90	95	126
泰安府	新泰	154	180	198	210	171	161	147	147	224
泰安府	莱蕪	52	128	79	153	179	54	98	188	104
泰安府	泰安	76	105	73	59	64	36	35	49	42
東昌府	聊城								102	101
済寧府	金郷									121
沂州府	蘭山								161	67
曹州府	鉅野	142	124		76	162	121	95	122	186
山東省合計		5152	5288	4796	4527	5445	4430	4340	6255	6087
	朝陽	292	266	407	291	403	467	693	841	1407
	凌源	118	82	181		239	146	248	777	722
	平泉					133	117	116	120	332
	臨榆	183	199	121	89	88	92	92	189	230
	阜新	69	219			16	106	109	87	93
	河間	104	34		33	34	16	18	15	23
直隷省合計		1800	1792	1331	1261	1608	1521	1849	2767	3591
	錦	130	180	40	36	84	58	61	112	115
	彰武	12				46	44	41	48	23
	遼陽								79	46
	錦西									87
東三省合計		485	535	395	302	568	418	409	572	607
其他		43	35	17	28	34	37	46	48	66
採炭苦力現在数		7482	7650	6539	6117	7655	6406	6644	9642	10351

資料：満鉄鉱業部地質課『満洲に於ける鉱山労働者』1918年、234頁。

表3　１９１７年１２月末本溪湖炭坑労働者出身地

出身地	実数
山東省	691
直隷省	238
山西省	10
河南省	2
安徽省	1
東三省	661
錦州	7
営口	7
蓋平	2
鉄嶺	3
奉天	165
遼陽	56
本溪湖	421
西辺外	1
合計	1604

資料：満鉄鉱業部地質課『満洲に於ける鉱山労働者』1918年、255頁。

表4　１９１９－１９２３年山東省内移民出身地内訳

①１９１９－２０年

	県数	実数
山東鉄道付近地方	16	45000
山東半島部地方	14	168500
内		
龍口区域	4	67000
芝罘区域	4	41000
威海衛区域	2	25000
金家口区域	2	33500
石臼所区域	2	2000
河流地方	44	158000
内		
小清河流域区	30	130000
北部運河区	10	16000
其他	4	12000
合計		371500

典拠：151頁。

②１９２３年

地方	実数
済南地方	35000
黄河流域	20000
青洲	30000
沂洲	20000
膠洲	50000
登洲	100000
莱洲	60000
福山	35000
合計	350000

典拠：152頁。

資料：中島宗一『民國十六年の満洲出稼者』満鉄庶務部調査課、1927年。

三　1920年代後半以降1940年代まで

第三の時期、1920年代後半に入り移民の流入はこれまでにないほどの規模で展開した。この時期には自然災害・戦乱による難民が急増する。これらを対象として作成された一連の調査資料群は、従来満洲移民の特徴・普遍性をあらわすものとして扱われている。この当否を確認すべく、満洲移民の出身地を考察する前に、1920年代から40年代にいたる満洲移民流入の概況をまとめておきたい。

表５　１９２３－４４年度入満離満者数

	入満数	離満数	残留数	入満数	離満数	残留数	入満数	離満数	残留数
1923				342	241	101			
1924				377	200	177			
1925	479475	193093	286382	492	239	253			
1926	646717	272453	374264 ?	647	272	375	646612	272453	374159
1927	1043772	281295	762477	1044	281	763	1043772	281295	762477
1928	967154	342979	624175	967	343	624	967154	342979	624175
1929	941661	541254	400407	942	541	401	941661	541254	400407
1930	673392	439654	233738	673	440	233	673392	439654	233738
1931	416825	402809	14016	417	403	14	416825	402809	14016
1932	372629	448905	-76276	373	449	-76	372629	448905	-76276
1933	568767	447523	121244	569	448	121	568768	447524	121244
1934	627322	399571	227751	627	400	227	627322	399571	227751
1935	442667	420314	22353	444	420	24	444540	420314	24226
1936	364149	382966	-18817	358	367	-9	364149	366761	-2612
1937	323689	259093	64596	319	259	60	323689	260000	63689
1938	492376	252795	239581	502	253	249	492376	250000	242376
1939	985669	390967	594702	1012	391	621	985669	390967	594702
1940							1318907	846581	472326
1941							918301	688169	230132
1942							1068625	661235	407390
1943							791960	139910	652050
典拠：	資料Ａ			典拠：資料Ｂ　単位：千人			典拠：資料Ｃ		

資料Ａ：興亜院華北連絡部『華北労働問題概説』興亜院華北連絡部、1940年、175頁。
　　原資料は満洲労工協会発表統計による。
資料Ｂ：高岡熊雄・上原轍三郎『東亜経済研究Ⅱ　北支移民の研究』有斐閣、1943年、190-191頁。
資料Ｃ：満洲国史編纂刊行会『満洲国史』各論、満蒙同胞援護会、1971年、1156頁。

１．1920年代後半から1940年代にかけての満洲移民と資料の再検討

山東省では1926年以降連年水害が、河南省西部では1928年に旱害と蝗害などが連続して発生[27]、加えて北伐の波及、潰兵の横行、恣意的な税収の為、難民の流出が拡大した[28]。表5は1923年から44年にかけての満洲への入境者（入満者）と出境者（離満者）を表したものである。もちろんこの数字は実数ではなく、比較的把握しやすい港湾上陸者数に陸路入境者の見積数を加えたものである。資料によって若干その数字が異なるがその傾向はほぼ一致している。1920年代前半には50万人を超えることのなかった入満者は1926年には約64万人にふくれあがり、翌27年には100万人を突破した。満鉄は以後4箇年にわたってこの入満者の実態調査を行った。それぞれの報告書の内、1927年（民国16年）度分には次のようにある。

「従来山東及び直隷から満洲に入込む出稼人の数は年によって差はあるが、平均五十万内外と註

せらる、処が昨民国十五年春から確然と増加の傾向を示し更に本年に入っては未曾有の多数に昇り、調査の結果は六月末までの半年間に約六十三万と云う推定数に達し年末までには百万を突破する見込である。」[29]

翌1928年（民国17年）の情況は次のように述べられる。

「民国十六年の出稼者（苦力、避難民、農業移民等一切を含む）数は上半期約七十万、下半期約四十八万、合計約百十八万の巨数を示し、而も従来の移動に於いて季節労働者が大半を占めたるに対し、永住的移民が約半数を占め同年内帰還数を控除した残留数は七十二三万の夥しき数に達した。」[30]

1928年に北伐は終結し華北の兵乱は小康状態となる。しかし冒頭で述べたように河南省で旱害が発生した為引き続いて当地からの移民の流入が続いた。ただしこの記述には明らかな誤解がある。後述するが、通常満洲へ赴いたものは数年サイクルで帰還する事が多い。当年は災害の目立たない年に満洲に赴いた者の帰還年度にあたり、加えて故郷の災害を見て帰還を先延ばしにした者も相当に含まれるだろう。入満者と離満者の差が即、人口の増加とは見なされないのである。1929年（民国18年）については以下のようである。

「民国十八年即ち昭和四年度は出稼移民激増の年度たる昭和二年以来丁度満三年に当る。東三省対国民政府の南北対立に因り、年中行事の如く行われた北支那を中心とする紛糾、及びそれに因って醸成された内乱は、民国十七年七月東三省の中央帰順以来、今日まで休息の形であり、出稼避難民の出身地たる直、魯両省地方は久し振りに小康維持の状態を現出した。……然るに本年南満三港上陸者統計並に陸路入満者の推定数計算の結果は約百零八万にして依然百万を超過している。」[31]

表5の見積では94万人の入満となるがここで引用した資料の見積では108万となっている。どちらが実数に近いかは分からないが、前々年と前年にくらべれば微減と考えられよう。1930年（民国19年）は29年に引き続いて入満者数が減少した。表5の見積では約67万の入満となっている。

「昭和二年以来山東、河北、河南等各省から溢れ出た移民の洪水は漸年流勢を減ずるの趨勢にあったが、尚昭和四年に至る過去三箇年間は百万を下ることが無かった。然るに、昭和五年に至るや流勢頓に軟ぎ、幼児数をも含めて約八十五万に激減した。」[32]

その激減の理由は資料によると、第一に1929年郷里の豊作、第二に同年下半期の張学良政権とソ連の東清（中東）鉄道を巡る衝突、第三に1930年の銀価暴落による出稼収入の目減り、第四に天災が小康状態になった事があげられている。

ここで使用した四年にわたる一連の資料は満洲移民研究においてしばしば引用されるが、この資料の扱う時期は移民数が突出した四年間であり、必ずしも平年の出稼ばかりであった時期のものではない事に注意を要する。事実、大災害が収まった1930年には満洲への流入は26年以前の水準をとりもどしつつあった。しかし、だからといってこの資料が完全に特殊なもので一般性を有していないとは言えない。たとえば民国16年度の報告は大量の難民が発生し年間百万人もの移民が満洲に流入していた時のものであり、対象には相当多数の難民が含まれていた。にもかかわらず後述するように三年以内に満洲から故郷へ帰ろうとしている者が六割という高い割合を示している。つまり故郷を棄ててきた

難民以外にも平年通り故郷へ帰還する事を前提とした出稼が多数含まれていたと考えられよう。

この点を微視的に検討すれば、以下の特徴を見出す事が出来る。第一に「春去冬帰」という季節的変動を挙げる事が出来る。東北の一年一作という農業条件により播種期前に東北への移動量が増え始め、収穫後に帰還者が増加する傾向であった。第二に移動の周期性とその短さをあげる事が出来る。難民が急増した1927年の満鉄旅客課の調査では、滞在年数三年以下が60%である[33]。故郷を棄てる難民が多数含まれているにもかかわらずこの滞在期間の短さは注目に値する。1930年春に大連と営口にて出稼を対象に行われた調査によれば[34]、三分の一が二度以上両地域間を移動している。1933年の大連埠頭の荷役の調査では[35]滞在年数一年以下が22%、三年以下が55%である。この「春去冬帰」及び一生の内に何回か両地域を往復するパターンは清代乾隆年間にはすでに見られたものであったが、この難民が大発生したと考えられる時期においてもなお維持されていた。ただし交通機関の発達によってそれらはサイクルの短いより頻繁なものとなった。第三に性比の不均衡である。先の1930年春の調査によれば、移民の81%を男性が占めている。これに先立つ1927年の難民が急増した時期においても大連に上陸した者の83%が男性であった。さかのぼって1926年、25年には、それぞれ89%、92%と更に圧倒的多数を男性が占めていたのである。難民には女性や子供が含まれるので性比はより均衡のとれたものになるであろう。だが予想に反して難民の流出がピークを迎えた時すら八割は男性であり、平時では九割を男性が占めていたのである。20年代初頭の関東庁の現住人口調査[36]によれば、15～55才の男性人口の突出は著しく、移住民社会は全体として性比178と均衡を欠いた状況を呈している。これは出稼の存在を直接的に表現している。第四に満洲から華北への送金・持ち帰り金の多さである。やや後にくだるが日中戦争中の1938から42年にかけての華北政務委員会の収入のうち出稼のもたらした金が6.87%を占めている事からも理解できよう。以上の諸点をまとめれば、難民の急増する1920年代後半の自然災害下でも主流は出稼であり、1927年以降四年間の満鉄による調査も、この点に留意すれば充分に一般性を含んでいたものと判断できる。そして移動の目的は満洲での雇傭をもとめるものであり、循環的なものでいつかは故郷へと還流していく出稼であったと言える。

1930年代に視点を移そう。1910年代から45年まで満洲の土木建設業の中心的役割を担った榊谷仙治郎の日記にはしばしば華北からの出稼労働者に関する記述が見られる。賃金の変動についても貴重なデータを提供してくれるが、その他目を引くのが満洲事変の後に顕著となる人夫の逃亡や募集の困難さといった記事である[37]。その一方で満洲事変、満洲国成立後の華北から満洲への人口移動は、関東軍及び満洲国によって統制の対象・制限の対象としている[38]。満洲国側は治安維持、漢民族の勢力抑制、将来における日本人発展の余地保留、満洲人労働者の生活安定とその向上、中国人出稼労働者による華北への送金・現金持ち帰り防止を目的として、中国人流入の抑制と日本人・朝鮮人移民の促進に乗り出したとされる[39]。だがこれは榊谷の土木建設業のような華北出身移民（出稼）に依存する各産業の要求とは矛盾するものであった。1934年1月から3月にかけて労働統制委員会において関東軍と在満産業界の間で妥協が図られ、4月には大東公司が設立、華北と満洲の両方で活動を開始した。それは入満希望者に査証を登録・発給するものであり、満洲国は査証のない者の入域を拒否して全体として移民の数を抑制しようとしたのである。前掲表5を参考とすれば1932年度は約37万3千人、33年には56万9千人、34年度には約62万7千人の入域が見られた。取り締まりが本格化する35年以降は、

同年が42万人（許可数44万人）、36年が36万4千人（許可数36万人）、37年が32万4千人（38万人）と、それぞれ計画された入域許可数はほぼ達成、抑制に成功した[40]。だが37年以降は同年4月の産業開発五ヶ年計画開始、7月の盧溝橋事件による関内との往来の阻害、日本占領下華北での労働力需要の拡大というように[41]、一転して満洲の労働力調達事情を逼迫させる事となる。結果、反対に華北からの労働力の導入、労働力動員体制の確立が進行する。40年代にはいると労働力不足は更に深刻化した。その契機は40年7月に実施された華北向け為替送金の制限である。さらには日中全面戦争下の華北でインフレーションが進行し、華北の農民にとっては満洲への出稼以外に華北の大都市への出稼や食料の販売によって生計を立てる機会が増加した事もその一因と考えられる。張声振は盧溝橋事件前後の華北満洲の両地域の賃金を比較したが、事件以前は明らかに満洲側の賃金が高かったが、事件後は華北の日本占領地域での労働力需要が高まった事、戦時インフレーションが進行した事で大差なくなったとしている[42]。1940年代の労働者の募集の困難さについて次のような記述がある。

表６　１９２０年代後半華北の難民発生

単位：%

①華北諸省難民 離村率	
１９２７年山東・平原	13.04
１９２７年山東・冠県	20.00
１９２８年陝西・隴県	5.30
１９２８年陝西・郃陽	5.70
１９２８年河南・項城	6.87
１９２８年河南・商城	7.22
１９２８年河南・扶溝	14.13
１９２８年河南・南召	20.89
１９２８年河南・夏邑	24.00
１９２８年甘肅・寧定	19.00
１９２８年甘肅・環県	31.30

典拠：2頁。

単位：%

②旅吉山東会館及び哈爾賓総商会難民 構成		③旅吉山東会館収容難民 離村率		④１９２９年黒龍江の河南各県難民 構成	
沂州	46.70	１９２７年		安陽	17.31
済南	10.73	費県	26.60	湯陰	11.44
泰安	9.84	沂水	13.90	鞏県	9.29
兗州	8.36	莒県	13.80	滑県	8.28
東昌	8.18	蒙陰	11.60	内黄	6.28
曹州	6.32	１９２８年		洛陽	6.08
青州	6.11	費県	23.30	平等	5.53
莱州	1.87	蒙陰	10.50	宜陽	3.21
登州	1.33	沂水	10.20	淇県	3.14
膠州	0.52	莒県	2.86	孟津	3.12
済寧	0.04			汲県	2.79
				澠池	1.57
				延津	1.30
				新郷	1.00
				自由	0.78
				氾水	0.73
				渉県	0.42
				長葛	0.42
				偃師	0.14
				其他	17.17
典拠：14頁。		典拠：14頁。		典拠：15頁。	

資料：陳翰笙『難民的東北流亡』国立中央研究院社会科学研究所、1930年。

「北支に行けば労力が有り余って、始末に困っているように考えている人も尠くないようである。しかし如何に北支でもそれ程無尽蔵ではないし、又それ程易々と労力を掻き集める事は出来ない。殊に経験工・熟練工に至っては洵に寂寥の感を覚えている。甚だしきは場合により場所によっては、日傭苦力を集めるのにすら難渋をしていることもある。例えば塘太地区の如き塩田地区に於ては、碼頭荷役・土建・工業等の使用労力に需給の均衡を得ない場合が多く、勤労報国隊の結成をすら考慮中であるといわれているから案外である。」[43]

そこで41年9月に決定された「労務新体制確立要綱」の下での労働新体制は、満洲国内部、及華北での強制的な労働力動員を展開する[44]。さらには日中戦争の主戦場となった華北にくらべて満洲国内の治安が安定していた事もあり、1940年代には入域者は再び100万人の大台を突破した。

2．満洲移民の出身地

以上の概況をふまえてこの時期の移民の出身地について検討する。問題は1920年代後半の大災害の時期とそれ以降の展開である。表6は20年代後半の災害による難民の出身地を含めた調査をまとめたものである。①によれば山東省西部の平原県、河南省の扶溝、南召では全人口の一割以上が難民となった。また山東省南東部の沂州の被害は大きく、②③の山東会館の調査では沂州を故郷とする難民は約半分を占めていた。1928年は河南で大災害が発生し、29年にかけてここから難民が多数流出した。表7は満鉄の1927年（民国16年）の撫順炭坑での調査によった山東省内の出身地の分布である。被災地域である山東省南部の出身者が多く含まれているが、これはこの時に始まる傾向ではない。先に見た表2の1910年代の同

表7　１９２７年３月－７月撫順炭鉱募集華工地方別統計

地域	県	実数
山東省	登州府属	無
	莱州府・高密	4
	莱州府・即墨	347
	莱州府・莱陽	2
	莱州府・掖県	13
	莱州府・濰県	26
	青州府・博山	75
	青州府・安邱	116
	青州府・益都	50
	武定府・濱県	16
	武定府・利津	16
	泰安州・東阿	258
	泰安州・平陰	109
	泰安州・東平	71
	泰安州・泰安	8
	済南府・済南	83
	済南府・長清	86
	済南府・徳県	42
	済南府・淄川	116
	済南府・章邱	83
	済南府・歴城	23
	済南府・禹城	30
	東昌府・臨清	78
	沂州府・莒県	16
	兗州府・寧陽	19
	兗州府・汶上	97
	曹州府・鉅野	61
	曹州府・金郷	74
	曹州府・魚台	66
	曹州府・城武	40
	曹州府・鄆城	52
	曹州府・済寧	20
直隷省	塩山	44
	天津	186
	南皮	37
	平泉	27
	清河	31
	呉橋	13
	清源	8
	河間	13
	良郷	8
熱河省	朝陽	82
	凌源	6
合計		2552

※　「府」は筆者が補った。
※　臨清は臨清直隷州、魚台と済寧は済寧直隷州。
※　平泉・南皮は原資料では山東省に分類されていた。
資料：中島宗一『民國十六年の満洲出稼者』満鉄庶務部調査課、1927年、154-157頁。

じ撫順炭坑での調査に現れているように、この時点ですでに山東省南西部の諸県へと移住民の出身地は拡大していた。災害はこの拡大の後押しをしたと考えてよいだろう。

表８　満洲入域回数形態と出身地

	新客		混合		旧客		合計	
	組数	員数	組数	員数	組数	員数	組数	員数
山東省	859	3021	809	5253	667	1798	2335	10072
済南道	125	398	106	630	104	337	335	1365
済寧道	156	612	173	1169	82	186	411	1967
東臨道	187	870	202	1866	48	121	437	2857
膠東道	391	1141	328	1588	433	1154	1152	3883
河北省	60	162	55	406	2	92	117	660
其他	5	14	12	87	2	5	19	106
在満者	6	19	2	5	15	20	23	44
混合			2	260			2	260
不明	22	72	4	35	14	35	40	142
合計	952	3288	884	6046	735	1950	2571	11284
					?		?	

※　済南道は中北部、済寧道は南西部、東林道は西部、膠東道は東部である。
※　？の合計が合致しないが、原表のままとする。
資料：満鉄調査課『満洲出稼移住漢民の数的考察』1931年、67頁。

表９　１９４０年度の苦力需要数（単位千人）

需要地→	華北		満洲		蒙疆		合計	
供出地↓	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率
河北省	400	50.0%	608	44.5%	33.6	66.0%	1041.6	47.0%
山東省	270	33.8%	708	51.9%	7.9	15.5%	985.9	44.5%
山西省	60	7.5%	9	0.7%	2.6	5.1%	71.6	3.2%
河南北部	30	3.8%	32	2.3%	2.6	5.1%	64.6	2.9%
江蘇北部	30	3.8%	4	0.3%	0.9	1.8%	34.9	1.6%
安徽北部	10	1.3%	3	0.2%	0.1	0.2%	13.1	0.6%
其他		0.0%	1	0.1%	3.2	6.3%	4.2	0.2%
合計	800	100.0%	1365	100.0%	50.9	100.0%	2215.9	100.0%

資料：前田一『特殊労務者の労務管理』（産業能率増進叢書）山海堂、1943年、180頁。

表１０　撫順炭坑在籍中国人の出身地（１９２６－４３年）

	満洲国			満洲国外				合計
	奉天	熱河	満洲全体	山東	河北	関内全体	朝鮮	
1926	5632	1277	8012	21116	8821	30429	10	38465
	14.60%	3.30%	20.80%	54.90%	22.90%	79.10%	0.00%	100.00%
1931	3000		3010	12391	6741	19440	35	22500
	13.30%	0.00%	13.40%	55.10%	30.00%	86.40%	0.20%	100.00%
1936	9093	768	9969	18423	9030	27009	15	37932
	24.00%	2.00%	26.30%	48.60%	23.80%	71.20%	0.00%	100.00%
1937	11817	419	13170	18815	9416	28721	28	41964
	28.20%	1.00%	31.40%	44.80%	22.40%	68.40%	0.10%	100.00%
1938	13432	2005	17101	20748	11037	32222	15	49385
	27.20%	4.10%	34.60%	42.00%	22.30%	65.20%	0.00%	100.00%
1939	14850	1819	18307	28602	18277	47585	286	66243
	22.40%	2.70%	27.60%	43.20%	27.60%	71.80%	0.40%	100.00%
1940	15761	2006	19840	27444	15714	45148	316	66388
	23.70%	3.00%	29.90%	41.30%	23.70%	68.00%	0.50%	100.00%
1941	16917	1834	22796	29616	15456	50480	448	73768
	22.90%	2.50%	30.90%	40.10%	21.00%	68.40%	0.60%	100.00%
1942	14087	1024	17637	38172	16003	61024	516	79290
	17.80%	1.30%	22.20%	48.10%	20.20%	77.00%	0.70%	100.00%
1943	18979	6702	? 3640	32590	18362	58773	551	83021
	22.90%	8.10%	? 4.4%	39.30%	22.10%	70.80%	0.70%	100.00%

※　1943年満洲全体の数値は明らかにおかしいが、資料のままとした。
資料：松村高夫「撫順炭坑」松村高夫・解学詩・江田憲治編『満鉄労働史の研究』日本経済評論社、2002年、303頁。
原資料は『昭和十八年度撫順炭鉱統計年報』第一編（筆者未見）。

では大災害が終わり華北の兵乱が一応の終息のめどが立った1930年代にはどうなったのだろうか。先にも用いた1930年春の調査に基づき表8を作成した。山東省内に注目すると、四割近くが膠東道、すなわち山東半島出身者であり、残りの六割を他の地域が占めている。またリピーターかどうかに注目すれば、膠東道出身者はその多くが何度も満洲へ赴いているものであるのに対して、その他の地域は新客の数が多い。山東半島は出稼の歴史が古い為、何度も両地域を往復する人間が多い。逆に、出稼の歴史の新しいその他の地域では必然的に新客が多数を占めるのである。山東半島はいまだに移住民送出地の第一ではあったが、半分を占めるには至らなくなった。災害の時に拡大した山東西部南部の東臨道と済南道とが事態が収束した後も一定の割合を占めている。災害後、山東省の西部と南部は移住民の出身地として確固たる地位を築いたのである。

表9は1940年度満洲国・華北・蒙疆間の労働力調整を表している。満洲国内で必要とされる労働力の内、山東省と河北省でほぼ丁度半分ずつとなっている。表10は1926年から43年にかけての撫順炭坑の労働者出身地を表したものである。前述の労働力統制の時期には満洲国出身者が増加しているが、一貫して関内出身者が多数を占めている事にかわりはない。だがその構成比は当初は五対三程度で山東省出身者が河北省出身者に対して優位であったものの、37年日中戦争の開始後は河北省出身者が20％台と横ばいであるが、次第に山東省出身者がその割合を減らしているのが分かる。

これまでの議論をまとめておこう。清代から1900年にかけて満洲移民の出身地はほぼ山東半島の登州府と莱州府に限られていた。1900年の満洲と華北での鉄道の敷設は、この状況を変えた。山東半島は多数を占めていたけれども、山東省の北部や河北省がここに参入した。さらに1920年代後半以降は、山東省南西部や河南省の出身者が、当地で頻繁に発生した災害の為に増加した。そして災害が終息した後も、当地の人々は満洲へ行く事をやめなかった。おそらくは災害をきっかけとしてこれら遠方の地域と満洲との間に人の流れが新たに形成され、先行者が故郷にいる者を誘うなどして次々に移民するという事態になったと考えられる。

四　個別農家の出身地：農村調査の検討

本節では上に述べた議論を補完すべく、満洲国期に実施された農村調査をもとに各村落を構成する農家の出身地を整理する。満鉄や関東庁、満洲国は満洲で様々な農村調査を実施した[45]。その中で最大のものが康徳元年（1934年）度と三年度に実施された国務院産業部臨時調査局の手による農村実態調査である。この内、『戸別調査之部』[46]は南満から北満にいたるまでほぼ同一の方法に基づき各村落の農家を調査し16の表にまとめたものである。これによって各村落の比較が可能であり、満洲農村の実態を分析するのに有用な情報を提供してくれる。第二表「農家略歴表」は農家の出身地、同族関係、渡満以来の居住地、階級・所有土地面積の変遷を記載している。それは農家の自己申告によるものであり完全に正確であるとは言えない。例えば多くの農家は渡満の時期を“〇〇年”あるいは“〇〇年前”と理解しているわけではなく“何世代前”と伝え聞き記憶している。また出身地についても当て字や明らかな記憶違いが含まれ判別できないものもある。だが調査対象となる多数の村落を分析する事で、大体の傾向を知る事は可能だと思われる。本稿では『康徳元年度農村実態調査　戸別調

査之部』と『康徳三年度農村実態調査報告書　戸別調査之部』に加えて、これらの資料とほぼ同じ調査方法を踏襲している康徳三年度から五年度にかけての『県技師見習生農村実態調査報告書』のシリーズも用いた[47]。筆者が閲覧できた中で「農家略歴表」を載せるものは北満から南満まで50箇村にのぼる。

このデータを元に作成したのが「文末附表」である。“戸数”は村落内の農家の実数、“同族”は同族関係にあるものをひとくくりにした数字である。戸数は数としては巨大であってもあるいは元々は一つの宗族であり、近年分家したかもしれない。故に戸数に注目するよりも同族数に基づいて出身地を検討した方がより実情に近くなる。“渡満時期”はそれぞれの同族関係にある者がいつ入満（満洲に入域）したかをあらわした。調査時点（康徳元年が1934年、三年が1936年）より20年（清から民国への交代期）、50年（1880年代）、100年（1830年代）、150年（1780年代）を区切りとした。前述の通り農家の渡満時期については“何世代前”という記述が非常に多い。ここでは一世代25年として計算し直した。ただし明らかに年代が判明する場合にはそちらに従った。これを第二節で守田利遠『満洲地誌』の分析に使用した区分を適用し、次の八つに配分し直した。つまり参考までに再掲すると、①黒龍江省西部と内蒙古の一部、②黒龍江省中部（松嫩平原）、③黒龍江省東部（小興安嶺と三江平原）、④吉林省中部及び西部（東北平原中部）、⑤吉林省東部（長白山系）、⑥内蒙古（北部の東清鉄道沿線は①に加えた）、⑦遼寧省東部（遼河以東の遼東）、⑧遼寧省西部（遼河以西の遼西）及び熱河である。なお⑦⑧はここで新たに付け加えたものである。

①黒龍江省西部と内蒙古の一部

この地域に含まれる調査村落は愛琿県松樹溝屯（附－1）1箇村である。興安諸省の村落は一つも含まれていない。本村の同族数52の約半分25が山東省出身である。なお不明のものも11と相当いるので、実数としてはもう少し多いかもしれない。愛琿は清代に飛び地のように植民が進められたところである。同族22の渡満年代は150年前以前となっているが、これはその時にここに来住したというのではなく、いったん南満に定住した後、再び北満に向かった二次移住、三次移住のケースが殆どである。

②黒龍江省中部

ここは第二節で述べたとおり松嫩平原という穀倉地帯である。ここの調査村落は19箇村（附－2から20まで）と調査村落全体の約四割を占めている。綏化県蔡家窩堡屯（附－4）や蘭西県西家囲子屯（附－9）は清代にこの地に移住させられた旗人の村落だが、ここにも華北からの民人が入りこんできている。両村落共に旗人は数の上では優位に立っているが、山東からの民人がそれを追随している様が窺えよう。この2箇村を除外して考えると、富裕県七家子屯（附－12）において山東の同族10に対して河北が7というようにやや河北省出身者の存在感が強いものの、それ以外では山東省出身者が圧倒的に多い。安達県正四家子屯（附－10）と肇州県張家囲子屯（附－11）では省以下の府・州県レベルまで出身地を記載している。正四家子屯の全同族数20の内の10が、張家囲子屯の全同族数46の内、18がそれぞれ登州府出身となっている。またこの2箇村の中では自らを“山東省永平府”出身と見なすものが存在している。これは“河北省永平府”の誤りである。この誤りは偶然によるものではない。調査村落の中でも楡樹県于家焼鍋屯（附－23）、吉林省伊通県營城子屯（附－25）、吉林省懐徳県前湾溝屯（附－27）にも共有されている。満洲の漢民族移民の間では一般的に見られる誤解である。近

年の王雅林と張汝立による黒龍江省肇東市昌五社での調査研究に拠ると、当地区は20世紀に入ってから急速に開発が進んだ所である。その移民の来源は、関内、遼寧、吉林にある。だが興味深い事に河北省出身者の中には、楽亭県と昌黎県のような移住民を数多く析出する県を除いて、自らを山東人と自称する者がいるという[48]。これは自分の出自を誤解した、あるいは故郷の同郷関係を軸にネットワークを構築していく中で山東人を自称する事が有利であった、というような理由が考えられるだろう。ただし移民全体で山東人が占める割合が圧倒的に多かった事によって生じた現象である事には間違いない。

③黒龍江省東部

この地域に属する調査村落は樺川県陸家崗屯（附－21）と富錦県岳家屯（附－22）の2箇村のみと少ない。樺川県と富錦県は新開地に属す。直接移住した者と数世代前に南満に定着後に再び北上した者とが混在している。そのため渡満時期にバラツキがみられるのである。残念ながら山東省内部での出身地は不明だが、同省出身者は他を引き離している。

④吉林省中部及び西部

ここに属する調査村落は6箇村（附－23から28まで）である。梨樹県裴家油房屯（附－24）が山東の同族11に対して河北が7というようにやや河北省出身者が多いが、全体としては山東省出身者が主流を占めている。府・州県レベルまで出身地が判明するのは榆樹県于家焼鍋屯（附－23）、伊通県營城子屯（附－25）、懐徳県前湾溝屯（附－27）の3箇村である。于家焼鍋屯では山東省内である事は確かだが、府以下は不明のものが20と最も多い。だが判明する限りでは山東半島の莱州府出身の同族数が4である。なお山東省永平府は前述の通り河北省永平府の誤りである。營城子屯居住者は山東省各地から来住し地域による結びつきは見いだせない。前湾溝屯は残念ながら同族関係が判明しないのだが、総戸数63の内登州府出身の農家が19と最も多いように見える。ただし19戸全てが同時期に渡満しているのであるいは同族の可能性が高い。それに次ぐのが莱州府の12戸である。その内8戸は同様の理由で同族であるかもしれない。ただし山東半島出身者の比較的優勢を看取できよう。

⑤吉林省東部

ここに属する調査村落は4箇村（附－29から32まで）である。延吉県楊城村Ａ屯（附－31）とＢ屯（附－32）は朝鮮人移住者の村落である。Ａ屯に若干の漢民族の混住が見いだせるがＢ屯は完全に朝鮮人のみの村落である。この2箇村を対象から外し、残る2箇村を見れば、三台山屯（附－29）では山東省登州府が全体47の内16を占めていた。冉家村（附－30）では山東省出身者が優勢である。これらもまた新開地であるので渡満時期は様々である。華北からの直接移住者と南満からの二次、三次移住者が混住していると考えられる。

⑥内蒙古

この地域の村落は洮南県大茂好屯1箇村（附－33）のみである。この村落が当地域の一般的性格を有しているかは分からない。ただし、ここでもまた山東人が他を圧倒している。第二節で述べたようにここの開発年代は20世紀初頭に開発が始まるという、比較的若い新開地に属している。人々の渡満時期にはバラツキがみられるが、関内から直接ここに移住した者と、関内から南満を経た二次三次移民が混在している為であろう。

⑦遼寧省東部

当地域は遼河以東の遼寧省北部、遼東半島を含めている。勃海を挟んで山東半島と対峙する。調査村落は9箇村（附－34から42まで）である。鳳城県西門家堡子屯（附－35）のような旗人の村落を除けば、遼中県黄家窩堡屯（附－37）において山東省16に対して河北省12というように河北省出身者がやや多数であるけれども、全体としては山東省出身者の占める割合は極めて高い。山東半島の対岸に位置する荘河県金廠屯（附－34）のすべて、朝鮮国境にほど近い通化県大都嶺（附－42）のほぼ全てが山東省出身者である。畢家窩棚屯（附－41）のみ府レベルでの出身地が判明する。山東省は全体の同族数19の内13を占める。さらにその中では登州府が4、莱州府が2、済南府が3であり、登州府出身者がやや優勢といえよう。これは山東半島に近接するという地理的要因なのだろうか。続く遼西の事例を見てみたい。

⑧遼寧省西部及び熱河

当地域は遼河以西と熱河省であり、調査村落は8箇村（附－43から50まで）である。山海関を隔てて河北省と接しているので、距離的遠近を論ずるならば河北省出身者が多数を占めるはずである。豊寧県選将營子屯（附－46）、寧城県和碩金営子屯（附－47）、朝陽県七道泉子屯（附－50）では河北省出身者が高い割合を示しているが、そこでも多数派は山東省出身者である。府・州県レベルまで出身地が判明するのは綏中県大石槽屯（附－49）である。調査村落の中では山海関に最も近接しているが、ここで最も多いのは登州府を出身とする同族である。昌黎県や楽亭県のような河北省北東部の出身者は、その地理的近接にもかかわらず、少数派に属す。これは第一節での議論と一致している。たとえ河北省にほど近いところであっても山東省、就中、登州府出身者の占める割合が最も高い。

全体としてみた場合、山東省からの入域年代は古く河北省からは新しいようだ。同じ山東省内部でも登州府出身者は最も早期に入満し、そうでない地域の出身者は遅れて入満した。これもまた本稿第三節までの内容を補完している。満洲移民の出身地は、登州府・莱州府の山東半島から山東省西北・河北省へ、そして山東省西南部へと出身地を拡大させていったのである。

結論

本稿の内容は直上で述べたとおりであり、ここで改めて要約はしない。ここで論じた移住民の出身地の拡大は、交通機関の発達と大きく関係している。もともと登州府以外の地域では、満洲は遠すぎてそこでの出稼は行動の選択肢とならなりえなかった。だが、鉄道の建設、海上交通での汽船の運行、割引運賃の適用によって、満洲はより身近になった。1922年の大連と芝罘（今の煙台）間の船賃は小洋2.40元である。青島・大連の運賃は同2.50元であった。人々の移動期になると船会社間の競争原理が働いて青島大連航路の運賃は3月には1.00元に低落、4・5月には0.80元、6月に1.00元、7～12月に2.00元と変動する[49]。ではこの最も安い季節の運賃小洋0.80元は農民にとってどれほどの価値であろうか。農民の被傭労働の賃金を題材として、時代と地域が出来るだけ近いものの例を提示する。1910年代にドイツ租借地の膠州での調査によれば墨銀1ドルが1.80～2.20マルク、日工資が0.375～0.45マルクである[50]。1910年代後半の青島の墨銀1ドルは小洋（湖北・江南鋳造）1.1元或いは小洋（東三

省鋳造）1.3元に相当する[51]。青島では東三省鋳造の小洋が流通の大部分を占めていたので、ここでは墨銀1ドルを小洋1.3元と換算する。以上の換算比率をもとにすれば、小洋0.80元は1.87～2.288となる。これを、マルクを基準として日工資に対応させれば、船賃は、農閑期の工資0.375マルクの場合で、4.99～6.10日分、農繁期の工資0.45マルクの場合で、4.16～5.08日分の労働の対価という計算となる。清末以降の船賃は一週間の日工資を越えていない。ところで18世紀の乾隆年間では、前稿で論じた事であるが[52]、船賃はチャーター船の場合の制銭或いは東銭の100文（制銭16文）から商船への借乗代制銭1640文程度であると考えることが出来る。乾隆年間の山東省における農家生計の様相を詳細に知ることは困難であるが、ここでは家計内での「被傭労働」（他人の耕作地での労働）による収入と比較する。この被傭労働による収入に関して、『刑科題本』を用いた李文治氏や経君健氏によれば、乾隆年間山東省の長工（年工）の工資は制銭で3000～4500文の範囲内であった[53]。即ち一日換算で制銭約10～15文程度であろう。月工の工資では乾隆52年諸城県で800文（制銭か小銭かは不明）、日工の工資では同53年沂水県の50文（同じく不明）の二例がある。月工資と日工資の事例は少ないが、日工資は一日換算の長工資の二～数倍程度だから[54]、乾隆年間の山東省の日工資は制銭で20～50文であったと考えることが出来る。とすれば、値段の高低差があまりにも大きいので一概には言えないが、清代山東・東北間の船賃は最も安い場合で一週間以内の労働、高い場合で二三カ月の労働の対価であった。これに対して清末民国期は均一に安い値段で輸送手段を提供し、海港までの鉄道輸送も可能になったという点では、移動は容易になったと判断できる。そこでこれまで移民が見られなかった地域からも満洲へ赴く事が可能になったのである。さらに誰かが満洲に赴く事で、この先行する同郷関係や同族関係にある者を頼って後発の移民が発生し、それが連鎖的に移住現象を加速させたとも考えられる。

表１１　山東・河北両省における移民数と比率（1935年）

単位：人

地域		移民数	割合
河北省	津海道	88004	25.00%
	保定道	14378	4.10%
	京兆道	17461	5.00%
	大名道	11151	3.20%
山東省	済南道	19458	5.50%
	済寧道	27509	7.80%
	膠東道	143284	40.70%
	東臨道	30886	8.80%
	合計	352131	100.00%

資料：高岡熊雄等『北支移民の研究』有斐閣、1943年、21頁。

ただし、だとしても全ての地域、村落から均一に移民が紡ぎ出されたのではない。ここで移民の送出地である華北に目を移せば、いささか腑に落ちない事象が確認できる。1935年の山東省と河北省から満洲に赴いた移民の数と全体に占める割合を表11にまとめた。膠東道（山東半島）が最も高い数字を示すのは行論のとおりである。これに津海道（河北省東北部）が、さらに山東省西部の東臨道、西南部の済寧道が続く。満洲に近い済南道はもはや東臨道と済寧道に及ばない。登州府や莱州府からは全県からほぼ均質に移民を送出しているのだが、河北省の北東部は、同じく満洲に近接しているにも

かかわらず、そうではない。また一つの県に視点を移せば、例えば山東省北東部の陵県では「(移住民は) 或る村で多く、或る村で少なく、或る村では甚だしいことに存在せず、或る村では村外に移った人口は半分以上を占める」という。つまり同一県内で人口の流動率が様々であった。恵民県では「県の北半分では華工となる者は多く、南半分では比較的少ない」という[55]。つまり移民の送出地は決して均一に分布しているのではなく、省、県、村落のそれぞれのレベルでモザイクのように入り交じっているのだ。この原因については華北に目を向けねば理解できまい。筆者はかつてこのような情況が生じるプロセスを検討した[56]。移民を多出する地域は雇傭が少なく、そうでない地域には豊富な雇傭機会が存在しているのであり、そのような差異は農村経済の構造によって生じると考えられる。登州府は元来雇傭機会の少ない地域であった。交通の発達は華北の広い範囲に出稼の機会を与えけれども、山東省北部よりも南西部の方がこれに敏感に反応した。これもまた前者が比較的に発展した先進地帯であるのに対して、後者が雇傭機会の少ない地域だった為と推測できるのだ。この解明を含めた華北地域社会と満洲移民との関連が、次稿での論点となる。

---

(1) 鳥居龍蔵「満蒙の探査」1928年 (『鳥居龍蔵全集』第九巻、朝日新聞社、1975年所収)、345頁。

(2) 同上、342頁。

(3) 梶原子治『満洲に於ける農地集中分散の研究』満洲事情案内所、1942年、43頁・72頁・78－80頁。

(4) 楊余練『清代東北史』遼寧教育出版社、1991年。孔経緯『清代東北地区経済史』第一巻、黒龍江人民出版社、1990年。同『新編中国東北地区経済史』吉林教育出版社、1994年などを参照。

(5) 図1に見えるように、1970年代まではおそらくほぼ横ばいであるが、1870年代から80年代にかけて人口は僅かながら微増へと転じる。この1870年代の転機については別稿にて論ずる。

(6) 拙稿「清代乾隆年間における山東省登州府・東北地方間の人の移動と血縁組織」『史学雑誌』108－2、1999年。

(7) 松浦章「李朝漂着中国帆船の「問情別単」について」(上) (下)『関西大学東西学術研究所紀要』17・18、1984・1985年を参照されたい。また「問情別単」は前稿においても使用した。

(8)『同文彙考原編』巻七三、漂民八「甲午　報羅州漂人発回咨」。

(9)「正祖十五年辛亥十二月十八日　忠清道洪州牧長古島漂漢人問情別単」『備邊司謄録』第百七十九冊「正祖辛亥十二月十八日条」。

(10)「正祖十八年甲寅十一月初七日　備邊司馬梁鎭漂漢人問情別単」『備邊司謄録』第百八十二冊「正祖甲寅十一月初七日条」。

(11)『遼海叢書』巻一所収。「奉天南濱大海、金・復・蓋 (奉天有金州・復州・蓋州) 與登莱対岸、故各属皆爲山東人所據。鳳凰城乃極邊、而山之陬海之涯、草屋數間、荒田數畝、問之無非斉人所葺所墾。」

(12) 傅士俊「遼東半島南部に於ける漢民族移住の地理的考察」(大塚地理学会『大塚地理学会論文集』第二輯 (上)、古今書院、1933年所収)。

(13) 内田智雄『中国古代の家族と信仰』弘文堂、1948年。

(14) 千田稔・宇部隆夫『東アジアと『半島空間』』思文閣出版、2003年。

(15)「奉天南面、俱係海疆、金復雄蓋四城地方、与山東登莱両府相対。商帆人渡、不時往来、私載民人、勢不能免。」大学士張廷玉「議奏清査奉天流民条款」『軍機処档案録副』〔北19－353～4〕。〔北〕は北京第一歴史档案館所蔵を意味する。数字はフィルム番号である。以下同じ。

(16)「南通閩浙江蘇、北達奉天。南北商船絡繹不絶。」山東巡撫周元理「奏請酌改海疆汎防辦兵以重巡守事」『軍機処档案録副』〔台15075〕。〔台〕は台湾の故宮博物院を指す。

(17)「竊照、奉省南臨大海、与山東登莱等府僅隔一洋、片帆可渡。」盛京戸部侍郎徳風「奏報査辦山東私渡来奉天之人民事」『軍機処档案録副』〔北19－798～9〕。

(18) 当該地域の海上交通については松浦章「清代における山東・盛京間の海上交通について」『東方学』70、1985年も参照。

(19) 本稿では朴趾源『熱河日記：朝鮮知識人の中国紀行』一、平凡社東洋文庫、1978年、223－227頁に拠った。

(20)『清実録』嘉慶八年七月庚申。

(21) 塚瀬進『中国近代東北経済史研究：鉄道敷設と中国東北経済の変化』東方書店、1993年。

(22) 藤田佳久「二〇世紀前半期における旧「満州」地域の地域システムと地域像に関する研究」(一)(二)『愛知大学国際問題研究所紀要』121・122、2003・2004年。

(23) 守田利遠『満洲地誌』丸善、1906年。本書の第八編「満蒙西伯利亜と山東人」によった。

(24) 呉暁松『近代東北城市建設史』中山大学出版社、1999年。

(25) 満鉄鉱業部地質課『満洲に於ける鉱山労働者』1918年、43頁。

(26) 中島宗一『民國十六年の満洲出稼者』満鉄庶務部調査課、1927年、151頁。

(27) 朱漢国・王印煥「1928－1937年華北的旱澇災情及成因探析」『河北大学学報』(哲学社会科学版) 28－4、2003年。

(28) 陳翰笙『難民的東北流亡』国立中央研究院社会科学研究所、1930年、8頁。

(29) 前掲中島宗一、1927年、3頁。

(30) 栗本豊『民國十七年の満洲出稼者』満鉄庶務部調査課、1928年、1頁。

(31) 栗本豊『民國拾八年満洲出稼移民移動状況』満鉄調査課、1930年、1頁。

(32) 栗本豊『民國拾九年満洲出稼移民移動状況』満鉄調査課、1931年、1頁。

(33) 前掲中島宗一、1927年。

(34) 栗本豊『満洲出稼移住漢民の数的考察』満鉄調査課、1931年。大連駅小粟車候車房(大連駅四等客待合所)と営口駅小粟車候車房(大連駅四等客待合所)にて、それぞれ1930年3月20日－4月10日の20日間1852人、4月12日－23日10日間719人を対象に行われたものである。

(35) 満鉄経済調査会「満洲の苦力」『満鉄調査月報』13－6、1933年。

(36) 満鉄社長室調査課『満蒙全書』満蒙文化協会、1922年、「地理及び戸口」。

(37)『榊谷仙次郎日記』榊谷仙次郎日記刊行会、1974年。昭和7年1月26日には関内の混乱と直接募集の困難が述べられる。昭和8年(1933年)2月25日には苦力募集困難が、4月13日には労働力調達と流入抑制を巡る産業界と軍の対立が記されている。

(38) 松村高夫「満州国成立以降における移民・労働政策の形成と展開」(満州史研究会『日本帝国主義下の満州』御茶の水書房、1972年所収)、兒嶋俊郎「満州国の労働統制政策」(松村高夫・解学詩・江田憲治編『満鉄労働史の研究』日本経済評論社、2002年所収)。

(39) 前掲兒嶋俊郎、2002年、29頁。

(40) 前掲松村高夫、1972年、第2節第2項。

(41) 范力『中日“戦争交流”研究：戦時期の華北経済を中心に』汲古書院、2002年。

(42) 張声振「土木建築」松村高夫・解学詩・江田憲治編『満鉄労働史の研究』日本経済評論社、2002年、229－230頁。

(43) 前田一『特殊労務者の労務管理』(産業能率増進叢書) 山海堂、1943年、253頁。

(44) 前掲松村高夫、1972年。

(45) この満洲での農村調査の概要については中兼和津次『旧満洲農村社会経済構造の分析』アジア政経学会、1981年を参照。

(46) 国務院実業部臨時産業調査局『康徳元年度農村実態調査　戸別調査之部』(産調資料) 第一・二・三分冊、1935年と国務院実業部臨時産業調査局『康徳三年度農村実態調査報告書　戸別調査之部』(産調資料) 第一・二・三・四分冊、1936年。

(47) 国務院臨時産業調査局『康徳三年度県技師見習生農村実態調査報告書』1937年は吉林省伊通県、吉林省徳恵県、奉天省鉄嶺県、奉天省法庫県の四種がある。国務院産業部農務司『康徳四年度県技師見習生農村実態調査報告書』1937・38年は吉林省懐徳県、

吉林省九台県、錦州省綏中県（以上、37年発行）、錦州省朝陽県（38年発行）の四種がある。国務院産業部農務司『康徳五年度県技師見習生農村実態調査報告書』1938年は1種のみで、通化省通化県を対象とする。

(48) 王雅林・張汝立『延伸地帯』黒龍江教育出版社、1999年、12－13頁。

(49)『満蒙全書』満鉄庶務部調査課、1923年、巻六「移民及殖民・民国人労働者」、50－56頁。

(50) W・ワグナー著　高山洋吉訳『中国農書』刀江書院、1972年、618頁。

(51) 東亜同文会編『支那省別全誌　山東省』東亜同文会、1917年、第九編「貨幣及金融機関」第二章「青島に於ける貨幣及金融機関」。

(52) 前掲拙稿、1999年。

(53) 李文治等『明清時代的農業資本主義萌芽問題』中国社会科学出版社、1983年、230－2頁から長工の例を、496－7頁から月工・日工の例を参照した。史料には制銭立てと小銭立ての両方が表れる。李文治氏は制銭490文＝小銭1000文という比率を基に制銭に換算している。

(54) 全国平均で乾隆末年の一日換算の工資は長工で10文、月工で17文、日工で40.2文、嘉慶末年で長工15文、月工23文、日工47.7文、である（前掲李文治等、1983年、488頁）。ちなみに光緒末年・宣統年間の山東省では、景甦・羅崙『清代山東経営地主底社会性質』山東人民出版社、1959年によれば長工資が一日換算59文、短工資が124文である。

(55)「陵県。人口外移的特点：有的村多、有的村少、有的甚至没有、有的村外移人口占到一半以上。」「恵民県。北半部的村荘売華工的多、南半部較少。」路遇『清代和民国山東移民東北史略』上海社会科学院出版社、1987年、68－70頁。

(56) 荒武達朗「清末民国期山東省における農家経営と労働力移動」『名古屋大学東洋史研究報告』25、1998年。

附表　満洲各地農家の出身地

凡例：各表下の※は筆者による註記である。
各村落名の後の（　）は調査年度を表す。康徳元年は国務院実業部臨時産業調査局『康徳元年度農村実態調査　戸別調査之部』（産調資料）第一・二・三分冊、1935年、康徳三年は国務院実業部臨時産業調査局『康徳三年度農村実態調査報告書　戸別調査之部』（産調資料）第一・二・三・四分冊、1936年にそれぞれ拠った。康徳三年・県技師、康徳四年・県技師、康徳五年・県技師はそれぞれ小表下に典拠を示している。

①黒龍江省西部と内蒙古の一部

附－１　瑷琿県松樹溝屯（康徳三年）

			渡満時期					
出身地	戸数	同族	０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省	28	25		1	2	2	15	6
河北省	2	2		1				1
河南省	1	1			1			
山西省	2	1					1	
湖南省	1	1						1
雲南省	8	4					4	
吉林省（旗人）	3	2						2
寧古塔（旗人）	3	3						3
双城府	1	1						1
旗人	1	1						1
不明	11	11			1		2	7
合計	61	52	0	2	4	2	22	22

②黒龍江省中部

附－２海倫県後三馬架屯（康徳元年）

			渡満時期					
出身地	戸数	同族	０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東	43	36	1	10	15	5	1	4
河北	2	2						2
天津	2	2						2
河南省	2	2			1	1		
不明	3	3			2			1
合計	52	45	1	10	18	6	1	9

附－３　望奎県後四井屯（康徳元年）

			渡満時期					
出身地	戸数	同族	０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東	22	19		2	5	5	5	2
河北	10	8		1	2	1	3	1
天津	1	1					1	
不明	5	3			2			1
合計	38	31	0	3	9	6	9	4

附－４　綏化県蔡家窩堡屯（康徳元年）

			渡満時期					
出身地	戸数	同族	０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
旗人								
吉林	11	1						1
復州	3	3						3
鳳凰城	4	1						1
金州	1	1						1
岫厳	3	3						3
不明	1	1						1
民人								
山東	12	12	1	1	8			2
奉天	1	1			1			
江西	1	1			1			
不明	6	6						6
合計	43	30	1	1	10	0	0	18

※１番農家を含める宗族は吉林→北京→復という経路をたどってここに至った。なお北京への移住は清の入関時である。
※１番農家の出身地は原資料では復州となっているが吉林に改めた。
※７，１８，２０，２５，２６，４３，４５番農家は同族とされるが、２０，２５，４３番が岫厳出身、残りが鳳凰城出身となっているので二つの族と見なした。

附－５　慶城県張家焼鍋屯（康徳元年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東	56	42	1	2	17	12	2	8
北京	2	1		1				
天津	2	1						1
山西	1	1			1			
上海	1	1			1			
江西	1	1			1			
奉天（旗人）	1	1						1
復州（旗人）	1	1						1
不明	2	2						2
合計	67	51	1	3	20	12	2	13

※５０番農家出身地不明となっているが、４４番と同族と考えられるので、同じく山東出身に改めた。

附－６　呼蘭県孟家屯（康徳元年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東	47	41			25	12	2	2
河北	1	1			1			
山西	1	1			1			
奉天	2	2						2
合計	51	45	0	0	27	12	2	4

附－７　巴彦県西太平荘屯（康徳元年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東	38	27			22	5		
河北	4	4			4			
合計	42	31	0	0	26	5	0	0

附－８　青岡県董家店屯（康徳元年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東	40	34	1	2	11	9	7	4
河北	6	4			1		3	
熱河	1	1						1
不明	2	2						2
合計	49	41	1	2	12	9	10	7

※康徳二年に転入した１９戸を含む。

附－９　蘭西県西家囲子屯（康徳元年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
旗人								
山東	16	7					7	
奉天	3	3						3
吉林	1	1						1
民人								
山東	12	11			4	1	4	2
河北	2	2		1				1
奉天	3	2						2
金州	1	1						1
錦州	1	1						1
吉林	2	2						2
不明	2	2						2
合計	43	32	0	1	4	1	11	15

附－１０　安達県正四家子屯（康徳元年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省登州府	13	10			3	5	1	1
山東省武定府	1	1		1				
山東省永平府	5	4		1	2		1	
山東省吉州県？	1	1		1				
山東省英州府熱県？	1	1			1			
山東省不明	2	2			1	1		
河北省順天府	1	1			1			
合計	24	20	0	3	8	6	2	1

※山東省に永平府はない。河北省永平府の間違いであろう。
吉州は莒州、英州は兗州か？

附－１１　鞏州県張家園子屯（康徳元年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省登州府	26	18		1	10	3	4	
山東省莱州府	1	1				1		
山東省青州府	1	1					1	
山東省永平府	2	2			1	1		
山東省済南府	1	1						1
山東省武定府	1	1				1		
山東省済寧	1	1				1		
山東省不明	9	9		1	3	1	2	2
河北省順天府	8	1				1		
河北省天津府	4	4		1	2			1
河北省河間府	1	1			1			
山西省永平府盧龍県	1	1		1				
河南省蒙古站	1							1
河南省涓河府？	1	1			1			
不明	4	4						4
合計	62	46	0	4	18	9	7	9

※山東省に永平府はない。河北省永平府の間違いであろう。山西省永平府も同じく河北省永平府の誤りである。

附－１２　富裕県七家子屯（康徳元年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省	10	10			7	1	1	1
河北省	7	7	1	1	3	2		1
不明	8	8		1				7
合計	25	25	1	2	10	3	1	9

附－１３　富裕県李地房子屯（康徳元年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省	9	9			1	2	6	
河北省	3	3			1	1	1	
山西省	1	1					1	
合計	13	13	0	0	2	3	8	0

附－１４　訥河県孫家井（康徳元年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省	35	35	3	4	14	8	4	2
河北省	4	4	1				1	2
奉天（旗人）	4	3						3
熱河（旗人）	1	1						1
不明	3	2			1			1
合計	8	6	0	0	1	0	0	5

※本村は三つの小村によって構成される。康徳二年初めに来住した１３戸を含む。

附－１５　拝泉県玉殿元屯（康徳元年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－　年前	５０－　年前	１００－　年前	１５０年以上前	不明
山東省	23	23	2	2	10	5	3	1
河北省	3	3	1		1	1		1
不明	4	4						4
合計	30	30	3	2	11	6	3	6

附－１６　明水県郭殿仁屯（康徳元年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－　年前	５０－　年前	１００－　年前	１５０年以上前	不明
山東省	36	27	1	2	9	9	1	5
山西省	1	1						1
熱河省	1	1						1
雲南省	1	1						1
不明	4	4						4
合計	43	34	1	2	9	9	1	12

附－１７　克山県西屯（康徳元年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－　年前	５０－　年前	１００－　年前	１５０年以上前	不明
山東省	11	8	1	1	3	2	1	
河北省	1	1						1
吉林	3	2					1	1
旅順	1	1		1				
不明	2	2						2
合計	18	14	1	2	3	2	2	4

※４，１３番農家は原資料によれば同族となっているが、出身地が異なるので同族ではないと判断した。

附－１８　克山県東屯（康徳元年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－　年前	５０－　年前	１００－　年前	１５０年以上前	不明
山東省	18	17		3	7	3	3	1
河北省	2	1				1		
北京	4	2				2		
奉天	1	1						1
吉林	1	1	1					
合計	26	22	1	3	7	6	3	2

※１番農家は山東ではなく、北京出身と考えられる。

附－１９　克山県北屯（康徳元年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－　年前	５０－　年前	１００－　年前	１５０年以上前	不明
山東省	5	5		1	1	1	1	1
河北省	1	1					1	
天津	2	2				1		
不明	1	1						1
合計	9	9	0	1	1	2	2	2

附－２０　龍鎮県幇辦屯（康徳元年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－　年前	５０－　年前	１００－　年前	１５０年以上前	不明
山東省	12	9			2	4	1	2
河北省	4	2				1		1
関内	1	1			1			
遼陽	1	1						1
鳳凰城	1	1						1
黒山	1	1						1
朝鮮	3	3		3				
不明	11	11						11
合計	34	29	0	3	3	5	1	17

※原資料に拠れば同族の３番農家は河北出身，４番農家は関内出身，２９番農家は山東出身であるが関内出身に統一した。
※３１番は河北出身の誤りであろう。

③黒龍江省東部

附－２１　樺川県陸家崗屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省	16	14		1	6	2	2	3
山西省	2	2			1	1		
北京	1	1		1				
不明	3	3						3
合計	22	20	0	2	7	3	2	6

附－２２　富錦県岳家屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省	28	26			10	9	4	3
河北省	6	3		1	1		1	
不明	2	2			1			1
合計	36	31	0	1	12	9	5	4

④吉林省中部及び西部

附－２３　楡樹県于家焼鍋屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省莱州府	6	4		1	2		1	
山東省永平府	1	1				1		
山東省不明	25	20			2	8	10	
奉天省	2	1						1
合計	34	26	0	1	4	9	11	1

※山東省に永平府はない。河北省永平府の間違いであろう。

附－２４　梨樹県裴家油房屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省	19	11			2	3		6
河北省	20	7			1	4	1	1
不明	1	1						1
合計	40	19	0	0	3	7	1	8

附－２５　伊通県營城子屯（康徳三年・県技師）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省登州府	1	1					1	
山東省莱州府	1	1					1	
山東省東昌府	3	1				1		
山東省永平府	1	1				1		
山東省済南府	2	2					2	
山東省泰安府	1	1					1	
山東省不明	5	5	1		1	1	2	
河北省永平府	1	1						
承徳県	1	1						1
山西省洪洞県	2	2					2	
雲南省貴州府	5	1						1
不明	1	1						1
合計	24	18	1	0	1	3	9	3

※山東省に永平府はない。河北省永平府の間違いであろう。
資料：国務院臨時産業調査局『康徳三年度県技師見習生農村実態調査報告書（吉林省伊通県）』1937年。

附－２６　徳恵県東関家屯（康徳三年・県技師）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省	32	29	1	3	10	4	9	2
河北省	1	1				1		
合計	33	30	1	3	10	5	9	2

資料：国務院臨時産業調査局『康徳三年度県技師見習生農村実態調査報告書（吉林省徳恵県）』1937年。

附－２７　懐徳県前湾溝屯（康徳四年・県技師）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－ 年前	５０－ 年前	１００－ 年前	１５０年以上前	不明
山東省登州府	19					19		
山東省莱州府	12					11	1	
山東省武定府	1					1		
山東省永平府	2					1	1	
山東省済南府	2			1			1	
山東省曹州府	1					1		
山東省河城府？	1				1			
山東省不明	11					1	5	5
河北省永平府	2				1		1	
河北省河間府	4						4	
河北省楽亭県	1				1			
河北省不明	1		1					
不明	6					5		1
合計	63		1	1	3	39	13	6

※本村の同族関係は不明である。
※山東省に永平府はない。河北省永平府の間違いであろう。山東省に河城府は存在しない。
資料：産業部農務司『康徳四年度県技師見習生農村実態調査報告書（吉林省懐徳県）』1937年。

附－２８　九台県東蕪家店屯（康徳四年・県技師）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－ 年前	５０－ 年前	１００－ 年前	１５０年以上前	不明
山東省	32	21	1		6	14		
合計	32	21	1	0	6	14	0	0

資料：産業部農務司『康徳四年度県技師見習生農村実態調査報告書（吉林省九台県）』1937年。

⑤吉林省東部

附－２９　敦化県三台山屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－ 年前	５０－ 年前	１００－ 年前	１５０年以上前	不明
山東省登州府	16	16		1	7	7	1	
山東省莱州府	3	3		2		1		
山東省膠州	1	1				1		
山東省義州府？	3	3	1	2				
山東省蓋州？	1	1						1
山東省朱城？	2	2	2					
山東省不明	12	10	2	2	4	1		1
河北省永平府	5	5			3	1	1	
河北省河間府	2	2			2			
河北省（直隷省）不	2	2	1		1			
福州	1	1	1					
吉林省西小随河	1	1						1
合計	49	47	7	7	17	11	2	3

※原資料にて同族と扱われる３番と４３番は出身地が異なるので同族と見なさない。
※山東省義州府は沂州府の事、朱城は諸城の事であろう。蓋州は不明。遼東の蓋州の事か？

附－３０　盤石県冉家村（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－ 年前	５０－ 年前	１００－ 年前	１５０年以上前	不明
山東省登州府	3	3	1	1				1
山東省東昌府	1	1	1					
山東省青州府	1	1		1				
山東省不明	25	21	1	4	7	4	5	
河北省永平府	2	2		1				1
河北省順天府	2	2			1			1
河北省河間府	1	1					1	
河北省（直隷省）不	3	3		1	1			1
錦州	1	1						1
旗人	1	1			1			
合計	40	36	3	8	10	4	6	5

附－３１　延吉県楊城村A屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－ 年前	５０－ 年前	１００－ 年前	１５０年以上前	不明
山東省登州府	7	2	1				1	
山東省代明府？	1	1	1					
山東省不明	1	1					1	
奉天省	1	1						1
朝鮮	15	13	7	6				
合計	25	18	9	6	0	0	2	1

※代明府は河北省大名府の誤りであろう。

附－３２　延吉県楊城村B屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－ 年前	５０－ 年前	１００－ 年前	１５０年以上前	不明
朝鮮	24	16	14	2				
合計	24	16	14	2	0	0	0	0

⑥内蒙古

附－３３　洮南県大茂好屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－ 年前	５０－ 年前	１００－ 年前	１５０年以上前	不明
山東省	25	20	1	2	7	6	3	1
河北省（直隷省）	4	4	1	1	1		1	
雲南	1	1						1
朝陽	1	1						1
不明	1	1						1
合計	32	27	2	3	8	6	4	4

⑦遼寧省東部

附－３４　荘河県金廠屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－ 年前	５０－ 年前	１００－ 年前	１５０年以上前	不明
山東	38	16		1	2	6	5	3
合計	38	16	0	1	2	6	5	3

附－３５　鳳城県西門家堡子屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－ 年前	５０－ 年前	１００－ 年前	１５０年以上前	不明
旗人								
山東	11	2					2	
長白山	20	12						12
蒙古	5	4						4
雲南	1	1					1	
民人								
山東	7	7	2	3	1		1	
朝鮮	1	1	1					
不明	2	2						2
合計	36	27	3	3	1	0	2	18

附－３６　遼陽県前三塊石屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－ 年前	５０－ 年前	１００－ 年前	１５０年以上前	不明
山東省（民人）	39	19		1	2		13	3
山東省（旗人）	3	3					1	2
山東省正黄旗	1	1					1	
廂黄旗	2	1						1
正黄旗	1	1						1
満洲	1	1						1
不明	29	18					1	16
合計	76	44	0	1	2	0	16	24

※それぞれの経歴により１８，４８，５０番は山東出身・順治八年渡満、３２番は山東出身・渡満時期不明と判断した。

附－３７　遼中県黄家窩堡屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－ 年前	５０－ 年前	１００－ 年前	１５０年以上前	不明
山東省	24	16		1		3	8	4
河北省	21	12			1	5	5	1
山西省	1	1						1
吉林省	4	3						3
不明	9	7				2	2	3
合計	59	39	0	1	1	10	15	12

※８番は１２０年前に渡満したものと考えられる。

附－３８　蓋平県陳家屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－ 年前	５０－ 年前	１００－ 年前	１５０年以上前	不明
山東省	38	16		2		3	11	1
小雲南※	2	1					1	
河北省	15	5				1	3	1
雲南	2	2					1	1
合計	57	24	0	2	0	4	16	3

※小雲南は登州府にある。

附－３９　西豊県徳恩屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－ 年前	５０－ 年前	１００－ 年前	１５０年以上前	不明
山東省	33	29	2		13	5	7	2
雲南省	4	2			1		1	
蒙古	1	1					1	
不明	1	1						1
合計	39	33	2	0	14	5	9	3

附－４０　海龍県孫家街屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－ 年前	５０－ 年前	１００－ 年前	１５０年以上前	不明
山東省	39	31	1		3	3	8	16
河北省	4	4			1	1		2
山西省	2	2					1	1
海城県	1	1						1
合計	46	38	1	0	4	4	9	20

附－４１　鉄嶺県畢家窩棚屯（康徳三年・県技師）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－ 年前	５０－ 年前	１００－ 年前	１５０年以上前	不明
山東省登州府	7	4				1	3	
山東省莱州府	2	2					2	
山東省済南府	5	3					3	
山東省武定府	1	1					1	
山東省永寿府？	1	1					1	
山東省不明	6	3				1	1	1
河北省順天府	11	2				1	1	
河北省永平府	2	2			1		1	
河北省不明	5	1				1		
合計	40	19	0	0	1	4	13	1

※永寿は陝西省？

資料：国務院臨時産業調査局『康徳三年度県技師見習生農村実態調査報告書（奉天省鉄嶺県）』1937年。

附－４２　通化県大都嶺（康徳五年・県技師）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－ 年前	５０－ 年前	１００－ 年前	１５０年以上前	不明
山東省	39		1	12	17	7	2	
北京	1					1		
合計	40		1	12	17	8	2	0

※本村の同族関係は不明である。

資料：国務院産業部農務司『康徳五年度県技師見習生農村実態調査報告書（通化省通化県）』1938年。

⑧遼寧省西部

附－４３　新民県二道河子屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省	65	24	2		5	2	14	1
河北省（直隷省）	11	9	1	1	2	3	1	1
山西省	7	3			1	2		
遼陽	1	1			1			
不明	7	6						6
合計	91	43	3	1	9	7	15	8

附－４４　黒山県孫前家窩棚（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省掖県	54	1					1	
山東省塩山県	1	1					1	
河北省灤州県	2	1				1		
不明	8	7			1			6
合計	65	10	0	0	1	1	2	6

附－４５　盤山県孟家舗屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省	14	8			1	4	3	
河北省	35	22		2	6	6	7	1
山西省	2	1					1	
陝西省	1	1			1			
不明	3	3						3
合計	55	35	0	2	8	10	11	4

※３８番農家は同族関係のDに分類されているが、単独であると考えられる。

附－４６　豊寧県選将營子屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省	32	20	2	1	1	1	12	3
河北省	16	14	3	3	4		3	1
河南省	1	1					1	
山西省	24	14			1	4	9	
不明	6	6						6
合計	79	55	5	4	6	5	25	10

附－４７　寧城県和碩金営子屯（康徳三年）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省	41	18	1		2	2	12	1
河北省	16	11	3	5		2	1	
河南省	1	1			1			
山西省	8	3			1		2	
不明	6	6					1	5
合計	72	39	4	5	4	4	16	6

※３４番は河北出身ではなく山東出身、３５番は山西出身ではなく山東出身と考えられる。

附－４８　法庫県團山子屯（康徳三年・県技師）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－年前	５０－年前	１００－年前	１５０年以上前	不明
山東省	21	10			1	3	6	
河北省（直隷省）	15	7				2	5	
陝西省	1	1		1				
合計	37	18	0	1	1	5	11	0

資料：国務院臨時産業調査局『康徳三年度県技師見習生農村実態調査報告書（奉天省法庫県）』1937年。

附－４９　綏中県大石槽屯（康徳四年・県技師）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－　年前	５０－　年前	１００－　年前	１５０年以上前	不明
山東省登州府	25	6					5	1
山東省不明	2	2					1	1
河北省楽亭県	1	1	1					
河北省昌黎県	2	2			1		1	
河北省不明	4	2					2	
不明	7	2						2
合計	41	15	1	0	1	0	9	4

資料：産業部農務司『康徳四年度県技師見習生農村実態調査報告書（錦州省綏中県）』1937年。

附－５０　朝陽県七道泉子屯（康徳四年・県技師）

出身地	戸数	同族	渡満時期					
			０－２０年前	２０－　年前	５０－　年前	１００－　年前	１５０年以上前	不明
山東省	20			3	4	10	3	
河北省	13				1	12		
河南省	1				1			
山西省	7					1	6	
陝西省	2						2	
蒙古	1						1	
不明	3							3
合計	47	0	0	3	6	23	12	3

※本村の同族関係は不明である。

資料：産業部農務司『康徳四年度県技師見習生農村実態調査報告書（錦州省朝陽県）』1938年。